ISSN 0387-284 X

読書科学

第47巻 第4号（通巻 第 186 号）平成15年12月1日 発 行（季刊）

原著

表記の親近性が漢字仮名混じり語内の
文字検出課題遂行に及ぼす影響　藤田 知加子
川上 正浩

小学校児童と母親の絵本観の比較研究　小林 斗志子

中途失明者における失明前後の読書の変化　石上 智美
徳田 克己

文章内容に対する熟達度が
学術論文の批判的な読みに及ぼす影響　沖林 洋平

186

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原著

表記の親近性が漢字仮名混じり語内の
文字検出課題遂行に及ぼす影響　名古屋大学　藤　田　知加子
大阪樟蔭女子大学　川　上　正　浩　119

小学校児童と母親の絵本観の比較研究　聖徳大学　小　林　斗志子　128

中途失明者における失明前後の読書の変化
——盲導犬使用者を中心に——　筑波大学　石　上　智　美
筑波大学　徳　田　克　己　139

文章内容に対する熟達度が
学術論文の批判的な読みに及ぼす影響　広島大学　沖　林　洋　平　150

日本読書学会役員（2002年4月1日～2005年3月31日）

会　長（理事長）　鳴島　甫
副会長（副理事長）　有沢俊太郎
常任理事　内田　伸子　金子　守　桑原　隆　阪本　敬彦　塚田　泰彦
徳田　克己　茂呂　雄二
理　事　秋田喜代美　池田　進一　今井　靖親　倉澤　栄吉　佐藤　泰正
島田　康行　高木　和子　玉岡賀津雄　府川源一郎　福沢　周亮
増田　信一　湊　吉正　村石　昭三
監　事　岡田　明　桐原　宏行
常任編集委員　徳田　克己（編集委員長）
有沢俊太郎　池田　進一　金子　守　阪本　敬彦　塚田　泰彦
茂呂　雄二　Joseph J. Dilenschneider　James M. Furukawa
Donald A. Leton
編集委員　石原　敏道　今井　靖親　内田　伸子　大城　亘武　上谷順三郎
北尾　倫彦　向後　礼子　小林　國雄　香西　秀信　鹿内　信善
高木　和子　鄭　仁豪　塙　和明　府川源一郎　福沢　周亮
水野　智美　村井万里子　望月　善次　山田　純　山元　隆春
萬屋　秀雄

The Science of Reading, Vol. 47, No. 4 (2003)

表記の親近性が漢字仮名混じり語内の文字検出課題遂行に及ぼす影響*

名古屋大学　藤　田　知加子
大阪樟蔭女子大学　川　上　正　浩**

問題と目的

従来，視覚的に呈示された単語の認知過程における，表記形態による処理の差異が研究対象として取り上げられてきた。井上・齋藤・野村（1979）では，漢字の認知過程は，形態，音韻，意味の処理が並列的に行われ，必ずしも音韻の処理を必要としないのに対し，仮名の認知過程は，まず形態の処理が行われ，続いて音韻の処理，意味の処理がなされるという系列処理が行われると言われている。すなわち，漢字語は，視覚的特徴分析から，音韻的符号化を介しない心的辞書への直接アクセスが可能であるが，仮名の場合，音韻経路を経由したアクセスを要することを示している。ここでいう心的辞書とは，言語知識の中でも特に人間が心内に持つ単語に関する知識の集合を指す。

さらに，Hatta（1978）による漢字と仮名の認知に関する大脳半球機能差の研究（実験１）では，漢字１文字の処理は右半球優位であり，仮名文字の処理は左半球優位であることが示されている。このように，漢字と仮名とは，処理過程が異なるというのが古典的な見解であった。

しかしながら，広瀬（1984）によれば，仮名で表記された語（例：ラグビー）であっても，その表記で書かれる頻度が高ければ，漢字で書かれた語（例：野球）と同程度の速さで認知されることが示唆されている。つまりこのことは，漢字のみならず仮名の処理においても，視覚的表象を用いて，直接的に心的辞書へアクセスすることが可能であることを示す。同様に，カタカナ語の表記の親近性を操作した実験においても，見慣れた表記語の方が見慣れていない表記語よりも速く認知がなされることが示されている（川上，1993）。さらに，広瀬（1985）では，通常漢字で書かれる単語が仮名で書かれている場合，語彙判断（実在する単語か否かの判断）の時間に遅延がみられた。

これらの結果は，文字単位では処理が異なると言われている漢字と仮名のいずれの表記においても，見慣れた表記形態で書かれた語の場合，文字を単位とした処理ではなく，語を単位とした処理がなされていることを示すと解釈されている。つまり，これらの結果は，日本語を材料とした際の表記形態の親近性効果の証拠と見なされる。

このような表記形態の親近性効果に対する別の解釈として，特定の表記形態で書かれている語を見慣れた（学習した）結果，その表記語に対する処理単位が脳内に形成されたことを示すというものもある。たとえば佐久間・辰巳・笹沼（1987，1989）では，仮名単語の処理単位（佐久間らは“認知ユニット”と呼んでいる）について検討を加えている。佐久間他は，表記頻度が高い表記で呈示された語（例：むかし，テレビ）に対する反応が，そうでない表記で呈示された語（例：ナマエ，れたす）よりも速いことから，通常仮名で表記される語について，

* Script familiarity effect on letter detection in Kanji-Kana-combined words.
**FUJITA, Chikako (Nagoya University) and KAWAKAMI, Masahiro (Osaka Shoin Women's University)

文字単位ではなく単語単位で認知ユニットが形成されていると論じている。さらに，佐久間・伊藤・笹沼(1989)は，漢字2字で表記された語の処理には，その構成要素である漢字1文字ずつの処理単位が利用されるのではなく，それら構成文字とはべつの，単語を単位とする処理単位が利用されていることと論じている。

以上のような研究はすべて，漢字と仮名といった二分法的な考え方に対する反証としてなされてきたものであると言えよう。しかし，これらの研究は，同一の表記形態からなる語のみを検討の対象としており，漢字と仮名が混在した混合表記語に関しては検討していない。

仮に，漢字の処理は音韻を介さない直接的ルートを，仮名の処理は音韻を介する間接的ルートを通じて行われるのであれば，1つの語の中に漢字と仮名が混ざっている条件においては，語のある部分については直接的ルートを，他の部分については間接的ルートを辿って心的辞書へのアクセスが行われるということになる。

藤田（1999）はこの点を確認するために，漢字仮名混じり語を材料に，1つの単語内での処理様式の分離がありえるか否かを検討している。

具体的には，familiar条件（漢字仮名混じり語の送り仮名部分が平仮名書き）とunfamiliar条件（漢字仮名混じり語の送り仮名部分がカタカナ書き）の，それぞれの語彙判断に要する反応時間を指標として，漢字仮名混じり語の表記の親近性効果について検討を加えている。その結果，送り仮名部分が平仮名で書かれているfamiliar条件では，漢字部分の音韻数や送り仮名の文字数に関わらず反応時間に差はみられなかった。これに対し，送り仮名部分がカタカナで書かれているunfamiliar条件では，送り仮名の文字数の増加に伴って，語彙判断の反応時間が遅延するという結果が得られた。親近性の高い表記で呈示された漢字仮名混じり語の場合，送り仮名の文字数の影響を受けないというこの研究の結果は，漢字仮名混じり語においても表記の親近性が高ければ，直接的な処理がなされる可能性を示している。

この結果を踏まえ，藤田（1999）は，“単語全体を単位とした認知ユニット”の存在を示唆している。この“単語全体を単位とした認知ユニット”は，漢字仮名混じり語での視覚的表象と捉えなおすことができよう。すなわち，漢字と仮名が混ざっている語においても，カタカナ語や漢字語と同様に，視覚的表象が存在することになる。しかしながら，藤田（1999）の結果からは直接的に，漢字仮名混じり語の視覚的表象の有無を確認することはできない。なぜなら，見慣れた表記で呈示されると認識しやすいという表記の親近性効果は，単に視覚的な親近性の評価に基づく効果であり，その語に相当する視覚的表象が活性化されなくても表記の親近性効果は得られるという可能性があるからである（Besner & McCann, 1987）。したがって，視覚的表象が存在することを確認するためには，確実に，意味の処理を必要とする課題を設定する必要がある。

たとえばHealy（1976）は，語に関する意味の処理を必要とする課題として，文章を読みながら指定された文字を検出するという課題を用いている。彼女によると，英語のテキスト中の“t”の文字を検出する課題において，“the”という語の中の“t”の検出ミスが多くみられる。このような，高頻度語を構成する文字がその他の語を構成する文字よりも検出されにくいという現象は，word-frequency disadvantageと呼ばれる。さらに，Healy & Drewnowski（1983）は非単語内の文字よりも単語内の文字の方が検出しにくいという，word-inferiority effectも報告している。

また，Healy, Oliver, and McNamara（1987）の実験によると，一度に4語ずつ呈示する時よりも一度に1語ずつ呈示した時のほうが，検出ミスが少なかった。Healyらによる一連の実験結果から，読みの過程における文字や単語の処理に関して，Unitization modelが提唱されている。Unitization modelとは，文字の処理よりも単語の処理が先行することを仮定するモデルである。このモデルでは，高頻度の機能語は，単語を構成する文字の同定よりも先に，親近性の高い語の同定が行われるとされる。一旦単語の処理が完了するとすなわち，意味処理へ移行

すると，構成文字に関する処理はそれ以上行われず，結果として文中の文字レベルの処理は抑制される。したがって，theのような出現頻度の高い語は，単語内の文字の見落としが多くなると説明される。

ある条件においては文字の処理よりも単語の処理が先行すると仮定するHealyらのモデルについての議論は必要ではあるが，単語中の文字検出が，視覚的表象の強さ（語としてのまとまりの強さ）によって影響を受けるとする点は注目すべきである。

漢字仮名混じりでの視覚的表象が存在するならば，通常漢字仮名混じりで表記することが一般的な語の処理において，それらが仮名で表記された視覚的表象よりも，漢字仮名混じりで表記された視覚的表象の方が優位に用いられると考えられる。そのため，漢字仮名混じり語が仮名で呈示される場合よりも漢字仮名混じりで呈示される場合の方が，より速く意味の処理へ移行しやすいのである。

より上位の処理が行われた際に，その下位の情報処理は中断もしくは抑制されるというHealyの指摘を考慮に入れると，漢字仮名混じりでの視覚的表象が存在するならば，表記の親近性が高い漢字仮名混じり語内の構成文字の処理は抑制されると考えられる。

そこで，文章を読みながら特定の文字を検出するという文字検出課題を用い，漢字仮名混じり語においても，視覚的表象が存在することを改めて確認することを本研究の目的とする。

文章中の“the”に含まれる“t”が他の単語に含まれる“t”よりも見落とされやすいというHealyらによる結果と同様の結果が，漢字仮名混じり語内の文字検出においても認められると考えられる。すなわち，通常漢字仮名混じりで表記されるのが一般的な語の構成文字は，当該語を仮名で表記した際の構成文字よりも見落とされやすいと予測される。

実験1

方　法

要因計画：文章を読みながら特定の文字（本実験においては“え”）を検出する課題において，その文字を含む語が，見慣れた表記（ここでは漢字仮名混じり表記）であるのか，見慣れていない表記（ここでは平仮名表記）であるのかの1要因計画が用いられた。

材料：千葉康則著「快脳論」(1993，芸文社）より，第5章第1節の文章（1,166文字）を材料として使用した。本実験で使用した原文を付表1に示す。この文章には，平仮名の“え”が25回出現した。これらの内の5回は，原文では平仮名表記されている語（例：たとえば）の一部であり，残りの20回は，原文では漢字仮名混じりで表記されている語の一部であった。表1には文章中に出現した，文字“え”を含む漢字仮名混じり語を示した。これら20個の“え”を含む漢字仮名混じり表記の語の内，ランダムに10語を選択し，それらを平仮名表記（例：かんがえる）に改め，これをAリストとした。また，Aリストで選択された10語は漢字仮名混じり表記のままで，Aリストでは選択しなかった10語を平仮名表記に改めたものをBリストとした。本実験の操作において，漢字仮名混じり表記のままの語が見慣れた表記の語，平仮名表記に改めた語が見慣れていない表記の語と見なされる。文章中の漢字仮名混じり語は，活用によって語尾が変形しているものも含まれている（例：考えて）ため，表記の親近性に関する正確な指標は得にくい。しかしながら，本実験で用いられた漢字仮名混じり語の終止形については，5段階評定において，仮名表記する妥当性（平均評定値2.99）よりも漢字仮名混じりで表記する妥当性（平

表1　原文で出現した文字“え”を含む単語の一覧
（カッコ内は出現回数）

考える（10）	考えられ（2）	変える（1）
使えば（1）	考えない（1）	換えられる（1）
考えて（3）	与えられた（1）	

均評定値4.81）が高く評定されたものに限定された（天野・近藤，1999）。

また，本実験で用いられた文章は，“考える”という単語にのみ，一部鍵括弧が付与されていた。本実験では，鍵括弧を削除せず，原文と同様に鍵括弧を付与した文章を材料として用いた。

被験者：大学生44名が実験に参加した。これらの被験者の内，21名がAリストに，23名がBリストに回答した。

手続：実験は集団による質問紙の形で行なわれた。被験者は集団での講義中に質問紙を配布され，教示を受けた。教示は以下の通りであった。『ページをめくると，そこに文章が書いてあります。その文章を普通の速さで読んでいってください。そして，読んでいくときに，文章中にひらがなの「え」の字があればその字に鉛筆で丸をつけてください。「エ」の字には丸をつけないでください。書いてある「え」の字を見逃すことがあっても構いませんから，必ず普通の速さで読んでいくことを忘れないでください。また，読んで通り過ぎた後で「え」を見逃していたことに気づいても，戻って丸をつけないようにしてください。普通の速さで，一回読んだときに気づいたものにだけ丸をつけてもらえれば結構です。』

結果と考察

漢字仮名混じり語中の“え”の検出ミス数（最大10個），平仮名表記に改められた語中の“え”の検出ミス数（最大10個）が被験者ごとに集計された。各検出ミス数の平均値および標準偏差は表2の通りである。t検定による分析の結果，平仮名表記に改められた語における検出ミス数が漢字仮名混じり語における“え”の検出ミス数よりも有意に少ないことが示された（t (43) =4.07, p <.001）。このことは，見慣れた表記（漢字仮名混じり表記）においては，その部分の情報が処理される程度が，見慣れていない表記における部分の情報が処理される程度よりも浅いことを示唆している。すなわち，この結果は，Healy（1976）の結果と整合的である。

表2　実験1の各条件における平均検出ミス数と標準偏差

	漢字仮名混じり内	平仮名内
平均検出ミス数	1.27	0.32
標準偏差	(1.60)	(0.71)

検出ミス数の最大値は10

しかしながら，以上の結果は，検出すべき文字の出現する環境が原因となっていると説明することも可能である。すなわち，仮名よりもより視覚的複雑性の高い漢字が隣り合っていることによる側抑制が働いた結果，仮名表記語内よりも，漢字仮名混じり表記語内において見落しが多くなったと考察することも可能である。

そこで，実験2では，実験1での条件間の文字検出ミス数の差異が，漢字が隣り合うことによる側抑制の結果得られたものであるのか否かを確認する。

実験2

上述したように，実験1の結果が，より視覚的複雑性を持つ漢字が隣あっていることによる側抑制の結果であれば，“考える”という1つの漢字仮名混じり語内の，“え”の検出ミス数は，“る”の検出ミス数よりも多いと予想される。これに対して，実験1の結果が，側抑制によるものでないのであれば，“え”の検出ミス数と“る”の検出ミス数に差はないことが予想される。そこで実験2では，実験1と同様の手続きを用い，漢字仮名混じり語（考える）の送り仮名内での検出文字の出現位置と，その検出ミス数との関係について検討を加える。

さらに，実験1で用いた材料には，特定の単語（考える）の前後に鍵括弧が付与されていた。実験2においては，材料から鍵括弧を削除することにより，文章内での顕著さ（saliency）を“え”と“る”とで可能な限り同等にする。また，課題要求の困難度を挙げるために，ターゲット文章の文字検出を行う前にダミー文章を呈示する。

方　法

要因計画：検出文字（“え”あるいは“る”）を操作した被験者間の1要因計画を用いた。

材料：ダミー文章として日垣隆著「学問のヒント」

（1997，講談社現代新書）より，第７章の文章から部分引用した。

ターゲット文章として千葉康則著「快脳論」（1993，芸文社）より，第５章第１節の文章を材料として使用した。

これらの文章をです・ます調に変換した結果，ダミー文章中には“え”，“る”ともに８回ずつ，ターゲット文章中にはそれぞれ25回ずつ出現した。ターゲット文章中の25回のうち，各10回は“考える”という単語の一部であった。さらに，今回は文中から鍵括弧を削除した。

被験者：大学生・専門学校生131名が実験に参加した。そのうち，66名は“え”を検出する群，65名は“る”を検出する群に振り分けられた。

手続：実験は集団による質問紙の形で行なわれた。被験者は集団での講義中に，質問紙を配布され，以下の教示を受けた。『ページをめくると，そこに文章が書いてあります。その文章を普通の速さで読んでいってください。そして，読んでいくときに，文章中にひらがなの「え」の字があればその字に鉛筆で丸をつけてください。「エ」の字には丸をつけないでください。書いてある「え」の字を見逃すことがあっても構いませんから，必ず普通の速さで読んでいくことを忘れないでください。また，読んで通り過ぎた後で「え」を見逃していたことに気づいても，戻って丸をつけないようにしてください。普通の速さで，一回読んだときに気づいたものにだけ丸をつけてもらえれば結構です。』

「る」を検出する群に対しても同様に，「る」を検出するよう教示が行われた。

結果と考察

ターゲット文章中の，単語“考える”内の“え”（または“る”）の検出ミスの数（最大各10個）が，被験者ごとに集計された。各検出ミス数の平均値および標準偏差は表３の通りである。

表３　実験２の各条件における平均検出ミス数と標準偏差

	え	る
平均検出ミス数	1.03	0.88
標準偏差	(1.63)	(1.34)

検出ミス数の最大値は10

ｔ検定による分析の結果，“え”の検出ミス数と“る”の検出ミス数の間に有意差は見られなかった（t（125）＝0.59，*n.s.*）。すなわち，実験１の結果は，より高い視覚的複雑性を持つ漢字が隣あっていることによる側抑制によるものではないことが本実験で示された。

総合的考察

実験１では，見慣れた表記で書かれた漢字仮名混じり語（例：考える）内の構成文字の検出ミス数と，見慣れていない表記で書かれた語（例：かんがえる）中の構成文字の検出ミス数とを比較した。その結果，日本語文の読みにおいてもword-frequency disadvantageに相当する現象が観察された。ただし，本研究において使用された刺激は，単語の頻度を操作したものではなく，同一の意味をもつ単語を，漢字仮名混じりで表記したものと平仮名で表記したものであった。すなわち，本研究で用いた刺激は，どちらの表記で目にすることが多いかが異なる，すなわち表記の親近性の多寡が異なる刺激であった。このことから，本研究で観察された現象は，script-familiarity disadvantageとでもいうべきものである。加えて，単語内での文字位置による検出ミス数の差は見られないという実験２の結果からも，実験１で得られた差が，単に視覚的な見易さによる差ではないことが明らかとなった。

このような効果が観察された一方で，単語認知研究においては，古くから非単語よりも単語内の文字の認知が正確であるという単語優位効果（word-superiority effect）があることが知られている（Reicher, 1969）。本研究の結果は，この現象とは反駁する現象であるように見える。

単語優位効果とword-inferiority effectの齟齬は，課題の性質に起因するとされている（Healy et al., 1987; Chastain, 1986）。文字検出課題でのターゲット文字検出率は，一度に呈示される単語数に依存することが指摘されている

(Healy et al., 1987)。彼女らの実験によると，一度に4語ずつ呈示する時よりも一度に1語ずつ呈示した時のほうが，検出ミスが少なかった。また，Chastain (1986) は，1語しか呈示しない場合においても，その1語の中に語が含まれている場合（例：PAIN），word-inferiority effectが見られ，そうでない場合（例：PAN）は単語優位効果が見られると報告している。

Healy & Drewnowski (1983) のUnitization modelによれば，高頻度の機能語は，単語を構成する文字の同定よりも先に，親近性の高い語ユニットの同定が行われる。一旦単語の処理が完了すると構成文字に関する処理はそれ以上行わず，結果として文中の文字レベルの処理は抑制される。単語優位効果が認められる実験は，一度に1語ずつしか呈示されない課題であり，Healyらによる一連の研究で用いられた文章を読むという課題とは異なる。Unitization modelによれば，一度に1語ずつしか呈示されない場合には，単語レベルの処理が完了した後に，処理すべき次の対象（単語）がないため，同一の単語を処理し続けることになる。そのため，文字レベルの処理も完了することから，単語内の文字のほうが，非単語内の文字よりも認知しやすいという現象が起こると解釈される。

このモデルでは，単語の処理は個々の文字の処理よりも優先されると仮定している。そのため，文章を読む課題のように移るべき次の対象がある場合，単語の処理から必要な情報が得られれば，その単語を構成する文字の処理はそれ以上行われず，逆に抑制的に働く。したがって，単語内の文字の認知はしにくくなり，word-inferiority effectが生起すると説明される。

これに対し，Chastain (1986) は，相互活性化モデルを修正することで，これらの現象を説明することを試みている。

相互活性化モデルでは，文字レベルと単語レベルの階層間に，相互に促進的なリンクと抑制的なリンクを，同次元の階層内での単語同士あるいは文字同士には抑制的なリンクを仮定している。このモデルでは，従来観察されるような単語優位効果については整合的に説明がなされる。単語文字列が呈示された場合，それらが単語表象を活性化させ，その活性状態が文字ノード（文字の視覚的表象群）へフィードバックされるので，単語に含まれる文字ノードの活性化レベルはその分高くなる。一方で，非単語文字列が呈示された場合，これに対応する単語ノード（単語の視覚的表象群）は存在しないので，文字ノードへのフィードバックは起こりえない。したがって，単語内の文字の方が，非単語内の文字よりも認識されやすいのである。このモデルに，単語レベルから文字レベルへの抑制的な結合を付加すると，word-inferiority effectをも説明可能である (Chastain, 1986)。同時に複数の単語が呈示されることにより，心的辞書内の複数の単語ノードが一時期に活性化し，その単語ノード間の抑制が文字レベルへと伝播する。すると，単語内の文字に対応する文字ノードは，抑制的なフィードバックを受けることになる。そのため，単語内の文字の認識が困難になるのである。

Healy & Drewnowski (1983) のUnitization modelにおいても，Chastain (1986) の修正相互活性化モデルにおいても，複数の単語を処理することが必要となる場合，単語レベルの視覚的表象から文字レベルの視覚的表象へ抑制的なフィードバックがかかることによりword-frequency disadvantageが得られるとする点は共通である。すなわち，word-frequency disadvantageが得られるということは，その語に対応する視覚的語彙表象が存在するということである。

本研究で観察されたscript-familiarity disadvantageも同様の解釈が可能であろう。すなわち，表記の親近性に関する情報が意味への接近に利用され，促進的に働くと（表記の親近性が高い場合），表記の親近性が低い語に比べて意味への接近が速くなされるため，より下位の処理であるその語が含む文字の処理が抑制される。その結果，script-familiarity disadvantageが生じると考えられる。

以上の議論を総合すると，漢字仮名混じり語の視覚的表象が存在すると解釈するのが妥当である。

本研究において，漢字仮名混じり語の視覚的表象が存在することは確認されたが，漢字仮名混じり語の視覚的表象についてはさらなる検討が必要である。漢字仮名混じり語の多くは，動詞，形容動詞，形容詞である。これらは活用によって語尾が変化する。この語形変化と視覚的表象との関係も検討しなければならないであろう。

引用文献

天野成昭・近藤公久（1999）．データベース出版：NTTデータベースシリーズ「日本語の語彙特性」第Ⅰ期 三省堂.

BESNER, D., & MCCANN, R.S. (1987). Word frequency and pattern distortion in visual word identification and production: An examination of four classes of models. In M. Coltheart (Ed.), *Attention and performance XII*: *The psychology of reading*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Ins.

CHASTAIN, G. (1986). Word-to-letter inhibition: Word-inferiority and other interference effects. *Memory & Cognition*, **14**, 361–368.

藤田知加子（1999）．日本語の漢字仮名混じり語の認知ユニットに関する検討　心理学研究，**70**，38–44.

HATTA, T. (1978). Recognition of 125 Japanese Kanji and Hiragana in the left and right visual fields. *Journal of Experimental Psychology*: *Human Perception and Performance*, **2**, 235–242.

HEALY, A. (1976). Detection errors on the word the: Evidence for reading units larger than letters. *Journal of Experimental Psychology*: *Human Perception and Performance*, **2**, 235–242.

HEALY, A., & DREWNOWSKI, A. (1983). Investigating the boundaries of reading units: Letter detection in misspelled words. *Journal of Experimental Psychology*: *Human Perception and Performance*, **9**, 413–426.

HEALY, A., OLIVER, H. L., and MCNAMARA, T. (1987). Detecting letters in continuous text: Effects of display size. *Journal of Experimental Psychology*: *Human Perception and Performance*, **13**, 279–290.

広瀬雄彦（1984）．漢字および仮名単語の意味的処理に及ぼす表記頻度の効果　心理学研究，**55**，173–176.

広瀬雄彦（1985）．単語の認知に及ぼす表記の親近性の効果　心理学研究，**56**，44–47.

井上道雄・斎藤洋典・野村幸正（1979）．漢字の特性に関する心理学的研究―形態・音韻処理と意味の抽出―　心理学評論，**22**，143–159.

川上正浩（1993）．仮名語の語い決定課題における表記の親近性と処理単位　心理学研究，**64**，235–239.

MCCLELLAND, J. L., & RUMELHART, D. E. (1981). An interactive activation model of context effects in letter perception: Part 1. *An account of basic findings. Psychological Review*, **88**, 375–407.

REICHER, G.M. (1969). Perceptual recognition as a function of meaningfulness of stimulus material. *Journal of Experimental Psychology*, **81**, 274–280.

佐久間尚子・伊藤元信・笹沼澄子（1989）．プライミング・パラダイムによる漢字単語の認知ユニットの検討　心理学研究，**60**，1–8.

佐久間尚子・辰巳格・笹沼澄子（1987）．かな単語の認知(1)　日本心理学会第51回大会発表論文集，245.

佐久間尚子・辰巳格・笹沼澄子（1989）．かな単語の認知(2)　日本心理学会第53回大会発表論文集，625.

付表1 本研究で用いられた校正文章の原文

人間を他の動物と分けているのは何かというとき、パスカルの「人間は考える葦である」いう有名な言葉に代表されるように、「考える」ことであるとはしばしばいわれる。それでは、その「考える」とは、どういうことをもっていうのだろうか。

たとえば、脳を使えば「考える」ということになるのならば、人間以外の動物も脳を使っているのだから、考えない動物はいないことになる。しかし、ただ単に脳を使うということだけでは、パスカルの意味する考えるということにはならないだろう。

このときに、「考える」といっているのは、思惟すること、つまり、論理的に分析し推論していくことだと考えていい。論理的に分析し推論するためには、人は言葉を使わなければできない。

人間は、言葉を使って、知識をつないで、筋道を立てていくということをする。知識も筋道も言葉で作られている。こうした筋道を立てることを「考える」ことだとすると、言葉を持っていない動物は当然考えていないということになる。

人間でも、言葉で筋道を立てることなく、直感で何かを思いつくといったこともある。いわゆる閃きとかカンとかいわれるものである。あるいは、そのような直感で、感じたままに行動してしまう。直感のようなものは、動物にもあると考えられる。

言葉を使った論理的な思考が高等で、直感が下等な能力というような区別はできない。しかし、言葉を駆使し、知識を駆使して、筋道をたどって考えることは人間だけに与えられた能力である。

つまり、考える能力は、人間が言葉を持っているということから生まれてきた能力である。そして、このことは、人間と他の動物の脳を比べたときにも、明らかに違いが見られる。人間の場合には、脳の中に言語を扱うための場所があるが、動物の場合にはない。

このことは当然なことなのだが、それに対して、人間以外の動物でも言葉を持っている動物もいるのではないかという反論があるかもしれない。

たとえば、イルカは言葉を持っているといったことが、しばしばいわれる。しかしイルカの場合、それは言葉とは考えられない。いくつかの鳴き声があって、その鳴き声の種類を変えることによって、情報伝達をしているとは考えることができるが、それは人間が使っている意味での言語とはいえない。

たとえば、その鳴き声の種類がせいぜい二十種類くらいだとすると、伝達する意味内容の数はその二十だけということになる。ところが、人間の場合には、短い音の組み合わせが言葉で、その組み合わせで、無限に言葉をつくることができる。無限ということは、たいていのことは言葉に置き換えられるということである。

だから、動物によっては、仲間内に情報を知らせる手段をいくつか持っているとはいえても、それはわれわれ人間が使っているような意味での言葉とは、まったく異質なものだと考えていい。

SUMMARY

The purpose of this study was to examine whether or not words normally written in a combined Kanji-Kana script, e.g. "考える," are represented as a whole in the mental lexicon.

In Experiment 1, a 1166-character reading sample in which the hiragana letter "え" appeared 25 times was selected from a novel as experimental reading material. Among the 25 "え," 5 were embeded in words written in hiragana only. These 5 were kept intact and were not used as an experimental target letter. The remaining 20 occurrences of "え" were embeded in combined Kanji-Kana script in the original reading sample, e.g. "考える," "変える" etc. Out of the 20 combined words, 10 were randomly selected and transformed into all hiragana words, e.g. "かんがえる," "かえる" etc., and the remaining 10 were kept intact in Kanji-Kana form. These 20 words were used as the target words of the experiment. As some of the Kanji-Kana-combined words were placed within Japanese quotation marks called *Kagikakko*, e.g.「考える」in the original novel, these *Kagikakko* were kept intact. The 20 occurrences of "え" in the reading sample were analyzed to discern the letter detection acuity of Japanese students. The subjects were 44 university students who were asked to read through the reading sample at normal speed, circling the occurrences of hiragana "え" as it appeared. They were cautioned to not return to circle the hiragana "え" even if they noticed and missed marking its occurrence.

Experiment 2 used a different reading sample to test whether or not letter detection acuity was affected by the proximity of a hiragana letter to the Kanji in a Kanji-Kana-combined word. The only target word used was "考える," and other words were not used. The *Kagikakko* used in the original novel were all excluded so as not to alert readers to the target words under analysis. Subjects included 131 university students divided into two groups of 66 and 65 respectively. Given the same protocol directives and precautions in Experiment 1, the first group of students read through the reading sample, circling all the hiragana occurrences of "え" while the second group was asked to circle all "る" while reading.

Experiment 1 results revealed that subjects searching for the target hiragana "え" made many more detection errors with familiar Kanji-Kana than with unfamiliar all hiragana words. This disadvantage of familiar script words is in accordance with the 'word-frequency disadvantage' study of Healy, Oliver, and McNamara (1987). Experiment 2 proximity findings revealed that subjects missed detecting the first Kana-letter "え" as frequently as the second kana-letter "る" in the Kanji-Kana-combined word "考える." This result suggests that the familiar script disadvantage found in Experiment 1 was not derived from lateral inhibition of an adjacent Kanji character on the first kana-letter. Thus, this disadvantage reflects that Kanji-Kana words are represented as a whole in the mental lexicon.

The Science of Reading, Vol. 47, No. 4 (2003)

小学校児童と母親の絵本観の比較研究*

聖徳大学　小　林　斗志子**

問題の所在

近年，子どもの遊びが「戸外から家の中へ」変化したと言われているが，それにもかかわらず，一方では，子どもの“活字離れ”の傾向も現実問題として指摘されている。では，子どもにとって読みたいと思う本はどのような本なのであろうか。阪本・岡田・高木は，「どの年齢の児童も自分自身と同じ年齢の人物の登場する物語に興味を持つ。年少の児童の場合には，一般化はし難いが，子どもらしい体験をする空想の人物（通常は動物）に対して同一視が行われる。しかし，もっと年上の小学生の場合はハラハラさせる冒険を行う仲間を描いたお話や，より現実的な物語を好む」（阪本・岡田・高木，1980；179頁より引用）と述べている。活字のみの本と絵本とを一律に論ずることはできないとは思うが，絵本も，子どもにとって単に見て楽しむだけではなく，その世界に入って感情移入し，絵本の世界を自分も体験して楽しむものだ。そしてそれは，物語に入ってゆける確かな世界が絵本の中にあるか否かが，大きな問題となってくる。Smithは，「幼児が，一つの絵本のなかに求めているのは，冒険である。自分自身も主人公とともにそのなかに入ってゆき，いっしょにその冒険に加われるような，絵で描かれた物語である」（Smith，1964；202頁より引用）と述べている。瀬田も「小さい子たちが絵本に求めているのは，生きた冒険なのです。絵本は，手にとれる冒険の世界にほかなりません」（瀬田，1985；33頁より引用）と述べている。では，絵本の物語世界についてのこのようなおとな側の考えを子どもはどのように受け止めているのであろうか。

ところで，「グリム童話に代表されるような昔話には，残酷な場面が多いから，子どもの読み物としては適当でない」という説が，以前からある。残酷な場面を，子どもに見せまいとするおとなの考えの底には，「残酷な場面を含む読み物は子どもを残酷な行為に赴かせる」という考えが潜み，それを理由に原作の結末を改作してしまうことがある。グリムの作品は，因果応報の律を厳しく守っていて，罪ある物は残酷な罰を受けることになっているのが特徴である。しかし，昔話の残酷性を考えるとき，おとなは，子どもに与える恐怖感や嫌悪感ばかりに気をとられて，それが子どもの中に養い育てる，不安や恐怖や悪に勝つ力のことを忘れていないだろうか。谷本は，「罪と罰の重さをつりあわせることで物語に統一感をもたらすものであり，子供の持つ即物的な正義感に合致している」（谷本，1995；112頁より引用）と述べている。『おおかみと七ひきのこやぎ』を実験材料とした濱野（1988）の研究でも，5歳児であれば，残酷な場面だけに目を向けるのではなく，話の内容から勧善懲悪を理解するという結果が得られている。小野瀬・石隈・福沢（1993）は，『三匹の子ぶた』の「翻訳版」と「翻案版」を読み比べて，どちらを子どもたちに与えたいかを調べたところ，若い世代の幼稚園教師や幼稚園児をもつ両親は平和な印象の「翻案版」を与えたいと考えており，勤続16年以上のベテラン教師は残酷場面を含む「翻訳版」を与えたいと考えていることが明らかになった。さらに，蜂巣（2001）は，児童を対象にして同様の研究を行い，

* Elementary school students' and mothers' perception of picture books.

**KOBAYASHI, Toshiko (Seitoku University)

小学校低学年・中学年の児童では「翻訳版」を有意に好んでいたという結果を得ている。これらの研究結果から，おとなが読ませたいと思っているモチーフの物語を子どもはおもしろいとは感じておらず，ベテラン教師のみが子どもたちの好みを経験的に把握していたと言えるようである。また，Emans（1968）の研究では，子どもが好きそうだとおとなが予測した本を，実際に子どもが選ぶことはなかったという結果が出ている。松居（1974）は，絵本には，おとなの側から発想されている絵本と，子どもの側から発想されている絵本とがあるが，どちらかというと絵本の傑作といわれ，子どもに強く支持される絵本は後者で，前者の絵本は，おとなはよい絵本だと思うのだが，案外，子どもが楽しまなかったり，興味を示さなかったりすることが多いと述べている。これらの研究結果から，おとなと子どもの間で，意識の“ずれ”があると言わざるを得ない。

絵本に関する母親の意識調査は，出雲路・竹ノ谷・三井（1974）が5歳児の母親を対象に行っている。その結果によると，子どもに絵本を与える理由として母親は，「読書の楽しみを知らせ，読書に興味をもたせたい」「想像力ゆたかな子にしたい」「いろいろな知識を身につけさせたい」と考えている。母親が好きだと答えた絵本は，心情的に心の温かみを求めるものが多く，絵については表現のきれいさを求めているものが多いようである。一方，好きになれないと答えた絵本は，恐怖感，どぎつさ，殺伐さ等の，感覚的嫌悪感を引き起こすものが目立った。しかし，母親が好きな絵本には，名作絵本のダイジェスト版が多く，ほんとうの意味での読書の楽しみを味わうことができるか疑問であるとまとめている。幼児の場合，両親や保育者が絵本を与えることが多い。特に，母親の絵本観は，子どもの絵本経験に多大な影響を与えると考えられる。母親と子ども両者の絵本観を究明することは，より良い読書環境をつくるうえで，重要であると考える。

そこで，本研究では，小学校児童が好む絵本と母親が子どもに読ませたい絵本との“ずれ”がどのようなものか，また，小学校児童と母親両者が絵本に求めるものは何かに着目してそれぞれの絵本観を明らかにし，絵本の意味について考察することを目的とする。このため，本調査の対象児童である小学校4年生が約一ケ月で読みこなせる冊数を絵本20冊と想定し，これを選定した。選定は阪本（1977）による絵本のジャンル別分類，学校課題図書，音楽の教科書に掲載されている絵本などを考慮しながら，筆者と他1名の小学校教諭によって行われた。結果を表1に示す。なお，絵本の題名につけられているルビは，すべて省略する。

調査Ⅰ　小学校児童の好きな絵本と母親が子どもに読ませたい絵本

1．目　的

選定した20冊の絵本を対象として，小学校児童の好きな絵本，母親が子どもに読ませたい絵本をそれぞれ5冊ずつ選ばせ，小学校児童と母親の絵本の好みを調べ，その選択理由から両者の絵本観の“ずれ”を明らかにする。

2．方　法

ⓐ児童の調査

小学校4年生児童一人ひとりに20冊の絵本を，全部実際に手にとり読ませてみた。そして，その中から好きな絵本を1人5冊，順位をつけて選択させ，その理由を答えさせた。被調査者は，埼玉県桶川市立小学校児童で，選択理由は，あらかじめ用意した15の選択肢から1つを選ばせた。調査期間は，2001年9月3日（月）から10月12日（金）までで，各教室内に20冊の絵本を置き，休憩時間・読書タイムなどを利用して自由に読ませた。読んだ絵本は，各自のチェックリストに印を付けさせて，全員がすべて読み終えたことを確認した。

ⓑ母親の調査

児童の調査と同じ20冊の絵本を母親に読ませ，自分の子どもに読ませたい絵本を1人5冊，順位をつけて選択させ，その理由を答えさせた。選択理由は，あらかじめ用意した16の選択肢から1つを選ばせた。被調査者は，小学3～5年生の児童の母親28名で，上記の児童の母親は含まれていない。調査期間は，2001年10月15日（月）

表1 選定した絵本

絵 本 名	作家	画家	訳者	出版社
イソップどうわより ありときりぎりす	イソップ作より	高橋信也・松田辰彦・石森ヒカル	桜井正明	学習研究社
アンジュール ある犬の物語		Gabrielle Vincent		BL出版
うさぎのくれたバレエシューズ	安房直子	南塚直子		小峰書店
おおかみと七ひきのこやぎ	グリム童話より	Felix Hoffmann	せたていじ	福音館書店
おしいれのぼうけん	古田足日	田畑精一		童心社
オタマジャクシの尾は どこへきえた	山本かずとし	畑中富美子		大日本図書
おへそのひみつ	やぎゅうげんいちろう			福音館書店
おやゆびひめ	矢部美智代	東映動画		講談社
かさこじぞう	平田昭吾	成田マキホ		ポプラ社
さっちゃんのまほうのて	田畑精一・野辺明子・志沢小夜子・先天性四肢障害児父母の会共同制作			偕成社
じごくのそうべえ	田島征彦			童心社
シンデレラ または、小さなガラスのくつ	ペローの童話より	Errol Le Cain	中川千尋	ほるぷ出版
シンドバッドの冒険	新谷峰子	石田武雄		ひかりのくに
手ぶくろを買いに	新美南吉	黒井健		偕成社
白鳥のコタン	安藤美紀夫	水四澄子絵		ポプラ社
100万回生きたねこ	佐野洋子			講談社
ひろしまのピカ	丸木俊			小峰書店
ふしぎの国のアリス	山谷泰子	井上智		ポプラ社
ヘレン・ケラー	平田昭吾	大野豊		永岡書店
やまんばのにしき	松谷みよ子	瀬川康男		ポプラ社

から10月21日(日)までで，筆者の自宅に来てもらい，20冊すべてを読み終えてから，質問紙に答えてもらう。

3．結果と考察

ⓐ児童の調査とⓑ母親の調査の結果について，1）小学校児童と母親・2）小学校児童の男子と女子・3）男子の母親と女子の母親の3パターンの組み合わせで“ずれ”があるかどうかを検討した。まず，各パターンのそれぞれ2組の測定値群の間に，何らかの関係があるかないかを知る必要がある。そこで，絵本の好みの順位を調査していることから，順位相関を調べた。次に，各パターンのそれぞれ2組の間で，実際にどの絵本で“ずれ”があったのかを検討した。

1）小学校児童と母親との“ずれ”

ア．列位差法による相関係数は，$\rho=0.13$で，大変低い相関であることを示している。すなわち，小学校児童と母親では，ほとんど一致がないと言える。つまり，絵本の好みにおいて，両者には明らかな“ずれ”があった。

イ．小学校児童と母親のそれぞれについて，絵本ごとに選択した人数を取り上げ，両者の割合をx^2検定により比較したものが表2である。20冊のうち12冊について選択率には有意な偏りがあった。

2）小学校児童における男子と女子との“ずれ”

ア．列位差法による相関係数は，$\rho=0.23$で，低い相関があることを示している。すなわち，小学校児童の男子と女子では，わずかに一致が認められるが，性差があり，“ずれ”があったと言える。

イ．小学校児童の男子と女子のそれぞれについて，絵

表2　小学校児童と母親とのχ^2検定の結果

題　名	小学校児童		母親		
	N	%	N	%	
ありときりぎりす	17	21.5	0	0	**
アンジュール	33	41.8	10	35.7	
うさぎのくれたバレエシューズ	15	19.0	10	35.7	*
おおかみと七ひきのこやぎ	21	26.6	2	7.1	*
おしいれのぼうけん	46	58.2	3	10.7	**
オタマジャクシの尾はどこへきえた	6	7.6	9	32.1	**
おへそのひみつ	24	30.4	12	42.9	
おやゆびひめ	13	16.5	1	3.6	
かさこじぞう	21	26.6	0	0	**
さっちゃんのまほうのて	20	25.3	18	64.3	**
じごくのそうべえ	22	27.8	8	28.6	
シンデレラ	6	7.6	6	21.4	*
シンドバッドの冒険	26	32.9	3	10.7	*
手ぶくろを買いに	14	17.7	20	71.4	**
白鳥のコタン	4	5.1	1	3.6	
１００万回生きたねこ	46	58.2	16	57.1	
ひろしまのピカ	8	10.1	11	39.3	**
ふしぎの国のアリス	11	13.9	1	3.6	
ヘレン・ケラー	33	41.8	4	14.3	**
やまんばのにしき	9	11.4	5	17.9	

注）Nは実数、%は百分率である。df＝1

** $p<0.01$　* $p<0.05$

本ごとに選択した人数を取り上げ，両者の割合をx^2検定により比較し，20冊のうち10冊について選択の割合の偏りは有意であった。

3）男子の母親と女子の母親との“ずれ”

ア．列位差法による相関係数は，$\rho=0.61$で，かなり高い相関があることを示している。すなわち，男子の母親と女子の母親では，品等にかなりの一致がみられる。つまり，母親の間では，ほとんど“ずれ”はなかった。

イ．男子の母親と女子の母親のそれぞれについて，絵本ごとに選択した人数を取り上げ，両者の割合をx^2検定により比較したところ，20冊のうち３冊について選択の偏りは有意であった。

4）両者がそれぞれの絵本を選択した理由

小学校児童がその絵本を選択した理由のトップ３は，以下の通りである。

1．物語の展開がおもしろいから。
（おしいれのぼうけん等）

2．自分がこの絵本の中に出てくる人（動物）になったような気がして，ワクワクドキドキしたから。
（おしいれのぼうけん等）

3．おもしろそうな題だから。
（100万回生きたねこ等）

物語や題のおもしろさを挙げた児童が，約25％いた。また，日常生活の規則性・安定性を破るような予想外の展開をし，気持ちが高揚する場面のある絵本が好まれている。

一方，母親がその絵本を選択した理由のトップ３は，以下の通りである。

1．物語の伝えようとしている内容が，良いと思うから。　（さっちゃんのまほうのて等）

2．この絵が好きだから。
（100万回生きたねこ等）

3．物語の展開がおもしろいから。
（じごくのそうべえ等）

この結果から，両者とも，絵本の選択理由におもしろさを挙げていることがわかる。しかし，母親はおもしろさだけではなく，さらに，主題や描画も選択理由に挙げている。また，被調査者が小学校４年生の児童であることから，単におもしろいだけではなく，何か教育的な意義も絵本に求めているのであろう。初歩科学絵本の『オタマジャクシの尾はどこへきえた』が，母親では第８位であったが，小学校児童では第19位，寓話絵本・逸話絵本の『ひろしまのピカ』が，母親では第５位であったが，小学校児童では第17位であった。しかし，同じ寓話絵本・逸話絵本の『イソップどうわより　ありときりぎりす』では，小学校児童では第11位であったが，母親では第20位であった。これは，描画のせいではないかと考えている。小学校４年生にしては少し幼い感じの描画で

表3 小学校児童と母親に選択された上位・下位3冊

	小学校児童	母 親
上位三冊	『100万回生きたねこ』(3位) 『おしいれのぼうけん』(13位) 『アンジュールある犬の物語』(7位)	『手ぶくろを買いに』(13位) 『さっちゃんのまほうのて』(10位) 『100万回生きたねこ』(1位)
下位三冊	『オタマジャクシの尾はどこへきえた』(8位) 『シンデレラ または、小さなガラスのくつ』(10位) 『白鳥のコタン』(18位)	『白鳥のコタン』(20位) 『イソップどうわよりありときりぎす』(11位) 『かさこじぞう』(9位)

注（ ）内は、その絵本における相手の順位を示している。

あったからである。

5）小学校児童と母親が選択した上位・下位の絵本

小学校児童と母親が選択した上位3位・下位3位の絵本を表3に示す。上位・下位それぞれに重複している絵本が2冊ずつあり，合計は10冊である。

表3から，小学校児童と母親両者に人気のある絵本は『100万回生きたねこ』，両者に人気のない絵本は『白鳥のコタン』である。この2冊の絵本については，小学校児童と母親の両者に有意差が認められない（表2参照）ように，それぞれ同じ思いを持っていると言える。

一方，小学校児童が良いと思う絵本が母親には人気がなかったり，逆に，母親が読ませたいと思う絵本が小学校児童には人気がなかったりしている絵本が多数ある。特に，上位・下位合計10冊の絵本のうち，『イソップどうわより ありときりぎりす』・『おしいれのぼうけん』・『オタマジャクシの尾はどこへきえた』・『かさこじぞう』・『さっちゃんのまほうのて』・『手ぶくろを買いに』の6冊の絵本で，有意差が認められた（表2参照）。この点については，さらに調査Ⅱで究明していくこととする。

調査Ⅱ 小学校児童と母親に選択された絵本の内容分析

1．目 的

調査Ⅰにおいて，小学校児童と母親の絵本の好みについて，“ずれ”があることが明らかになった。そこで，調査Ⅱでは，絵本の好み・絵本の選択理由における小学校児童と母親の意識の“ずれ”について分かったことをふまえ，選択された上位・下位3冊ずつ合計10冊（重複が2冊ある）の絵本の内容を分析し，小学校児童と母親が絵本の何に着目して絵本を選択したのかを客観的立場から明らかにする。

2．方 法

1）評定用紙の作成

「物語絵本」の評価基準については，阪本（1977）が提案している。阪本（1977）は，良い絵本を選定するために，物語，描画，印刷・造本の視点から，絵本を評価するのに役立つと思われる18尺度を考案し，更に，この18尺度について，それぞれ5段階の評価尺度（阪本は評価尺度という用語を使用している）を作成した。

これを基に筆者は，主題は選択式とし，その他の構想・性格描写・叙述・描画・印刷，造本については，15尺度5段階の評定尺度を作成した。阪本の評価尺度と比べ，評定の言葉は同じであるが，項目数を減らし，小学校児童にとって評定しやすい形にした。詳しい説明を以下に述べる。

・主題―主題とは，本調査の場合，その絵本が表現している中心的な問題ととらえ，主題として考えられる36項目を設定した（表4参照）。

・構想―構想とは，本調査の場合，筋と同義で，主題が作品として展開している過程とする。以下の3尺度で5段階の評定尺度を作成した。

①物語のあらすじが，興味を引くか。

②物語の展開が，興味を引くか。

③物語の題が，興味を引くか。

・性格描写―性格描写とは，本調査の場合，その作品世

表4　10冊の絵本の主題

主題	下位						上位					
	ありときりぎ	かさこじぞう	白鳥のコタン	オタマジャク	シンデレラ	合計	手ぶくろを買	さっちゃんの	100万回生きた	おしいれのぼ	アンジュール	合計
思いやり		12	4		2	18 (18.0)	2	6		2		10 (9.4)
勇気			2			2 (2.0)	1			2		3 (2.8)
生命尊重			3	3		6 (6.0)		4				4 (3.8)
冒険心					1	1 (1.0)	2			8		10 (9.4)
協力										2		2 (1.9)
好奇心				3		3 (3.0)						
きびしさ	5		1			6 (6.0)	1	2			2	5 (4.7)
楽しさ		1				1 (1.0)				1		1 (0.9)
ハッピエンド		1			6	7 (7.0)			1	1		2 (1.9)
自立							1		1			2 (1.9)
愛情			4			4 (4.0)	7	4	8			19 (17.9)
笑い												
感謝		4	1			5 (5.0)						
自然愛護			2	3		5 (5.0)						
動物愛護				2		2 (2.0)	2		1		6	9 (8.5)
兄弟愛												
夢					3	3 (3.0)		1				1 (0.9)
平等							1	4				5 (4.7)
向上心												
死			1			1 (1.0)			7			7 (6.6)
教育的	3		1	4		8 (8.0)				1		1 (0.9)
残酷											1	1 (0.9)
正義												
友情										5	1	6 (5.7)
ユーモア												
悲惨戦争			2			2 (2.0)						
勤勉	7	2	1		1	11 (11.0)						
忍耐	1				3	4 (4.0)					1	1 (0.9)
正直	1				1	2 (2.0)	1					1 (0.9)
寛容					1	1 (1.0)						
怖い経験										2	4	6 (5.7)
ファンタジー					4	4 (4.0)	2			2		4 (3.8)
ヒーロー										1		1 (0.9)
希望			1		1	2 (2.0)		1			4	5 (4.7)
努力	1				1	2 (2.0)						
ナンセンス												

注）数字は実数、（　）内は、％である。
空欄は、いずれにも選択されなかった。

界での主人公や登場人物特有の性質や行動を表現したものとする。以下の２尺度で５段階の評定尺度を作成した。

①主人公や登場人物が，興味を引くか。

②主人公や登場人物の性格が，描き分けられているか。

・叙述―叙述とは，本調査の場合，語・句・句読点といった文字や符号で述べられたものとする。以下の3尺度で5段階の評定尺度を作成した。

①文章の用語の選択に注意が払われているか。

②文の長さは適当か。

③文章に親しみがもてるか。

・描画―描画とは，本調査の場合，各場面の情景を具体的に形象化したものとする。以下の4尺度で5段階の評定尺度を作成した。

①物語と絵は同じ歩調で展開しているか。

②描画により主人公や登場人物が識別できるか。

③描画は子どもに理解できるか。

④描画の色の選択は適切か。

・印刷，造本―印刷・造本とは，本調査の場合，印刷の明瞭性や造本の仕方とする。以下の3尺度で5段階の評定尺度を作成した。

①表紙は，興味を引くか。

②印刷は明瞭か。

③用紙は良質か。

2）調査方法

小学校児童と母親が選択したそれぞれ上位・下位3冊ずつ合計10冊（表3参照，重複が2冊ある）の絵本について，前述の評定用紙を使って，小学校教諭，学校図書館司書教諭，図書館司書計12名が内容分析をした。調査期間は，2002年1月21日（月）から2002年3月20日（水）で，分析者12名には，10冊の絵本を読み終えた後客観的な視点から評定用紙に記入するよう求めた。

3．結果と考察

結果は，表4・表5に表した。それらをふまえて，主題・15項目の評定尺度と客観的にみて評価の高い絵本との関係，あるいは，評価の低い絵本との関係について考察する。

表5　10冊の絵本の評定結果

15項目		下位 ありときりぎりす	かさこじぞう	白鳥のコタン	オタマジャクシの尾はどこへきえた	シンデレラ	平均	上位 手ぶくろを買いに	さっちゃんのまほうのて	100万回生きたねこ	おしいれのぼうけん	アンジュール	平均
構想	①	3.7	4.3	3.8	4.2	4.2	4.0	4.6	4.7	4.5	4.4	4.4	4.5
	②	3.5	4.3	3.9	4.1	4.3	4.0	4.5	4.6	4.4	4.7	4.4	4.5
	③	3.4	4.0	3.6	4.4	3.9	3.9	4.0	4.7	4.8	4.5	3.3	4.3
性格	①	3.8	4.3	4.1	3.5	4.3	4.0	4.4	4.7	4.5	4.0	4.1	4.3
	②	4.5	4.4	4.6	3.0	4.5	4.2	4.3	4.5	4.2	4.3	3.8	4.2
叙述	①	3.6	3.9	3.7	3.9	3.7	3.8	4.6	4.6	4.3	4.3		4.5
	②	3.5	4.4	4.1	4.2	3.9	4.0	4.3	4.4	4.8	4.3		4.4
	③	4.0	4.2	3.7	3.8	3.7	3.9	4.3	4.3	4.2	4.4		4.3
描画	①	4.3	4.1	4.4	4.5	4.0	4.3	4.9	4.8	4.9	4.7		4.8
	②	4.6	4.5	4.7	4.3	4.0	4.4	4.9	5.0	4.9	4.6	4.5	4.8
	③	4.7	4.8	3.9	4.6	2.9	4.2	4.9	5.0	4.7	4.7	3.6	4.6
	④	4.0	4.2	3.9	4.4	3.8	4.1	4.8	4.7	4.7	4.3	4.4	4.6
印刷等	①	3.5	3.8	3.4	3.8	3.7	3.7	4.7	4.1	4.2	4.2	3.7	4.2
	②	4.5	4.8	4.1	4.4	4.4	4.4	5.0	4.8	4.7	4.3	4.5	4.7
	③	4.3	4.4	3.9	4.3	4.6	4.3	4.9	4.8	4.8	4.3	4.6	4.7
平均		4.0 (0.4)	4.3 (0.3)	4.0 (0.3)	4.1 (0.4)	4.0 (0.4)	4.1 (0.4)	4.6 (0.3)	4.6 (0.2)	4.6 (0.3)	4.4 (0.2)	4.1 (0.4)	4.5 (0.3)

注）平均欄の（　）の数字は、標準偏差である。

『アンジュール』は、字のない絵本なので、斜線部分は回答なし。

1）主題について

表4から，上位に選択された絵本の主題で多かったのは，愛情・思いやり・冒険心・動物愛護である。愛情や思いやりで約36％をしめている。一方，下位の絵本の主題で多かったのは，思いやり・勤勉・教育的である。両方に共通している主題は，思いやりである。母親が選択した上位3冊の絵本の主題は，どれも愛情や思いやりが主であった。これらは，人として生きていくうえで子どもに伝えていきたい重要な心情である。幼児期から親しむことのできる絵本を通して，愛情や思いやりの気持ちを持つことのできる子どもになって欲しいという願いが感じられる。また，愛情や思いやりといった心情だけでなく，冒険心も，上位に選択されている絵本の主題で多かった。子どもにとっても，気持ちが高揚する冒険物語は，疑似体験でき楽しめるのであろう。勤勉や教育的な主題の絵本が下位だったのは，絵本選択の理由において，おもしろさが挙げられていたことを考えると納得できる。おもしろさを重視すると，勤勉や教育性からはかけ離れてしまうであろう。評価の低い絵本は，おもしろさが少ないということが分かる。

2）15項目の評定尺度について

表5から，上位の絵本のほうが，すべての項目において平均が高いことが分かる。各項目の評定値をみていくと，特に，次の6項目に明らかな差があった。

・文章の用語の選択に注意が払われているか
・物語のあらすじが興味を引くか
・物語の展開が興味を引くか
・物語と絵は同じ歩調で展開しているか
・描画の色の選択は適切か
・表紙は興味を引くか

主題・構想・叙述・描画などの要素について評価の高い絵本が，小学校児童と母親両者に好まれると言える。

3）客観的評価の平均が高い絵本について

15項目の客観的評価の平均が高い絵本は，『手ぶくろを買いに』・『さっちゃんのまほうのて』・『100万回生きたねこ』で，それぞれ母親の選択の第1・2・3位と一致している。つまり，母親は，客観的な視点で，絵本を選択していることが分かる。これらの絵本のおもな主題は，愛情や思いやりであり，これらの心情を味わってもらいたくて読ませたいのであると考えられる。

『手ぶくろを買いに』では《印刷は明瞭か》，『さっちゃんのまほうのて』では《描画により主人公や登場人物が識別できるか》・《描画は子どもに理解できるか》において，5段階の評定尺度で平均が5.0であった。

一方，小学校児童と母親とのx^2検定の結果とてらして考察すると，『100万回生きたねこ』については，有意差は認められない。すなわち，客観的評価が高く，小学校児童にも母親にも支持されているすぐれた絵本であると言える。しかし，『手ぶくろを買いに』・『さっちゃんのまほうのて』については，1％の有意水準で有意差が認められている。客観的評価の平均が高く，母親も読ませたいと思っている絵本であるが，小学校児童には人気が高くないようである。

特に，『さっちゃんのまほうのて』は障害者を扱った絵本で，思いやりの心情を育むすぐれた絵本だと考えられ，実際に，小学校の道徳教育で教材として使用されることの多い絵本である。学校課題図書でもあった絵本だが，《表紙は興味を引くか》という項目で評価が低く，また，おもしろさという点からも小学校児童には人気がなかったものと思われる。考察②においても，《表紙は興味を引くか》という項目は，絵本の評価を決める重要な項目であることが説明されている。小学校児童は，表紙を見て絵本を選択する傾向があると言える。

『手ぶくろを買いに』では，印刷については，明瞭であり評価も5.0で高いのだが，《物語の題が，興味を引くか》で評価が低く，小学校児童の興味を引かなかったものと考えられる。

4）客観的評価の平均が低い絵本について

15項目の客観的評価の平均が低い絵本は，『イソップどうわより　ありときりぎりす』・『白鳥のコタン』・『シンデレラ　または，小さなガラスのくつ』で，母親の選択の第20位・第18位，小学校児童の選択の第20位・第18

位であった。これもまた，両者の選択とほぼ同じということが言えるであろう。小学校児童・母親ともに人気のない絵本は客観的に評価しても低い結果となっている。これらの絵本の主題は，勤勉や思いやり，愛情，ハッピーエンドである。一つ一つを見れば良い主題なのであるが，絵本の中でそれだけを強調するとおもしろさが無くなり，評価が低くなるのだと考えられる。

一方，調査Ⅰの小学校児童と母親とのx^2検定の結果とてらして考察すると，『白鳥のコタン』については，有意差は認められない。すなわち，客観的評価が低く，小学校児童にも母親にも支持されていない絵本であると言える。しかし，『シンデレラ　または，小さなガラスのくつ』については５％の有意水準で，『イソップどうわより　ありときりぎりす』については１％の有意水準で有意差が認められている。

『シンデレラ　または，小さなガラスのくつ』については，小学校児童は第18位，母親は第10位に選択している。小学校児童に人気のないことが分かる。主題はハッピーエンドであり，15項目の評定結果のうち特に《描画は子どもに理解できるか》の評価が低かった。描画が子どもに理解されにくいと客観的に評価され，実際に小学校児童に理解されず，支持されなかったものと思われる。本研究では，ペローのシンデレラを研究材料として取り扱ったのだが，多くの出版社がシンデレラの絵本を出版しており，同じ題材でもグリムのシンデレラであったり，作家や画家が違ったりすれば，違った印象を受けることが多々あり，本研究の結果と違ってくることは充分考えられる。

『イソップどうわより　ありときりぎりす』については，小学校児童は第11位，母親は第20位に選択している。母親に人気のないことが分かる。主題は勤勉であり，15項目の評定結果のうち《物語の展開が，興味を引くか》・《物語の題が，興味を引くか》・《文の長さは適当か》の評価が特に低かった。調査Ⅰの絵本選択理由では，小学校児童と母親両者が絵本のおもしろさを挙げており，主題の勤勉は，おもしろさとはかけ離れたものである。また，構想も興味を引かず，文も短くて簡単すぎたようで，この点が母親の支持を得られなかった点であると考えられる。

5）上位に選択されているが，客観的評価の平均が低かった絵本について

小学校児童と母親両者が上位に選択しているが，15項目の客観的評価の平均が低かった絵本は，『アンジュール　ある犬の物語』である。この絵本は，字のない54場面の絵のみの絵本である。しかも，鉛筆でデッサンしているため白黒の描画であり，他の絵本のようなカラー印刷ではない。主題は，動物愛護である。15項目の中で特に，≪物語の題が，興味を引くか≫の評価が低かった。題名のアンジュールが，何のことなのか，誰かのことなのか説明はなく，不明のままで興味を引かないという評価につながったものと考えられる。考察②で述べたように，評価の高い絵本となりうるいくつかの項目のうち，絵本の特徴である絵と文の調和という観点から考えても，この絵本は当てはまらないのであろう。しかし，小学校児童では第３位，母親では第７位に選択されており，小学校児童・母親両者ともに好まれていることがうかがわれる。総合的な視点から絵本を見る場合，描画だけでその絵本を評価するということは難しいことなのかもしれない。

まとめ

以上から，絵本のおもしろさは小学校児童と母親両者の絵本観に共通した観点である。しかし，おもしろさの評価の順には，両者で“ずれ”がある。おとなは，おもしろさだけではなく，絵本の主題や描画も選択理由に挙げている。主題では愛情や思いやりを重視している。一方，子どもは，おもしろさのうち，特に気持ちが高揚するような冒険物語を選択している。物語の題や描画といった主題とは違った観点から選択していることが分かった。

付　記

本論文をまとめるにあたり，ご指導くださいました聖徳大学・福沢周亮先生に感謝致します。なお，本論文は聖徳大学大学院児童学研究科に提出した修士論文（2002年度）の一部を加筆・修正したものである。

引用・参考文献

EMANS, R.（1968）. Context clues as an aid to the reader, *Journal of Typographic Research*, **2**（4）, 369～373

蜂巣美穂子（2001）児童文学の翻訳・翻案に関する言語心理学的研究　聖徳大学大学院修士論文

濱野斗志子（1988）物語絵本における残酷場面の意味について―幼児の受容過程の心理学的分析―　三重大学教育学部卒業論文

出雲路猛・竹ノ谷真知子・三井和子（1974）絵本に関する母親の意識調査　読書科学　**21**　1～12

松居直（1974）絵本とは何か　日本エディタースクール出版部　3～9

小野瀬雅人・石隈利紀・福沢周亮（1993）『三匹の子ぶた』に関する心理学的研究(2)　筑波大学心理学系紀要　113～123

阪本一郎（1977）絵本の研究　日本文化科学社

阪本一郎（1977）物語絵本の評価法（提案）　読書科学　**20**　1～7

阪本敬彦・岡田明・高木和子（1980）読書興味の研究　野間教育研究所紀要　第31集　講談社　16～17，179～183

SMITH, L. H. 石井桃子ほか訳（1964）児童文学論　岩波書店　202～209

瀬田貞二（1985）絵本論―瀬田貞二子どもの本評論集　福音館書店　33～37

谷本誠剛（1995）児童文学入門　研究社出版株式会社　16～20，112～122

SUMMARY

The purpose of this research was to clarify the discrepancies in the way picture books are perceived by elementary school children and mothers.

In study 1, the subjects included 79 fourth graders from Saitama Prefecture and 28 mothers of third through fifth grade children, unrelated to the 79 children from Saitama. Within a period of one month, each child read all 20 picture books which were carefully selected as reading materials of this research. Each child was then asked to vote for the 5 picture books he/she liked best, selecting one reason for each of their 5 selections from a given list of 15 possible choices. Then the children's preferences were ranked on a chart, No. 1 being the best liked book and No. 20 being the least liked picture book. Each mother was asked to visit the researcher's home to read the same 20 picture books, after which she was asked to vote for 5 books that she would like her child/children to read. Similarly, she was asked to select one reason for each of her 5 selections from a given list of 16 possible choices, and these too were ranked on a chart. Mothers' rankings were compared with children's rankings. Results indicated remarkable discrepancies between children's and mothers' rankings, with significant differences found in 12 of the 20 picture books. As for the reason for their choices, both children and mothers found the picture book amusing, yet mothers also cited the themes and pictures in the books as additional reasons for their selections.

In Study 2, 9 teachers and 3 librarians conducted a content analysis of the 10 picture book selections of children and mothers from Study 1. The 10 books consisted of the 3 highest-ranked and the 3 lowest-ranked books from the two rankings, as 2 of the both groups' selections overlapped. Specialists checked-off at least one, but not more than two, main book themes from a 36-theme survey, and they also evaluated each book's plot, characters, descriptions, drawings and printing on a 5-point scale. Results indicated that the main themes of the highest-ranked picture book selections included affection, consideration, adventurousness and protective care for animals. Diligence and educational themes were found to be the main themes of the lowest-ranked books. Moreover, the specialists' 3 most highly evaluated picture books coincided with the top 3 books mothers selected as picture books they would want their children to read.

The Science of Reading, Vol. 47, No. 4 (2003)

中途失明者における失明前後の読書の変化
——盲導犬使用者を中心に——*

筑波大学　石　上　智　美
筑波大学　徳　田　克　己**

I．はじめに

中途失明による心理的なダメージは非常に大きい。Carroll (1961) は，中途失明による心理的衝撃を20の喪失としてまとめ，「Blindness is dying」という言葉で新しい人生の再出発の必要性を示している。また，進行性眼疾患のある人では，徐々に見えなくなる過程において失明に対する恐怖心が大きくなり，失明直後は感情のまひやうつ症状が現れる場合がある（坂本，1991)。失明による心理的衝撃の大きさから，自殺を考える者も少なくない。中途失明者が自尊心を取り戻し，自立した生活や社会参加を可能にするためには，まず自分の障害を受容できるかどうかが重要な問題である。

望月・徳田 (1996) は，読書によって中途失明者の障害受容や社会的適応が促進される可能性があることを指摘している。また，読書には「同一化（同一視)」，「カタルシス（浄化・情動触発)」，「洞察」という心理的治療機構があるとされており（福沢，1991；大神，1974)，これらが読み手である中途失明者の抑圧された感情を解放したり，欲求を満たしたりする上で有効に作用すると考察している。さらに望月・徳田 (1996) は，読書が失明後の障害受容や社会的適応にどのように作用するかを明確にするためには，さまざまな特性を持った中途失明者を対象に研究を行わなければならないと述べている。

中途失明者の中には，単独歩行手段を身につけ，積極的に社会参加をしている者がいる。単独歩行手段には白杖と盲導犬がある。個人差はあるものの，中途失明者が白杖歩行を習得することは容易ではない。一方，盲導犬は中途失明者にとって有効な歩行補助具であることが認められている (Pfaffenberger, 1976)。失明してから白杖歩行を習得するために，一般的には7，8年かかるが，盲導犬歩行の場合は2，3年で習得できることから，中途失明者の社会復帰が比較的早期に実現するとされている（徳田，2002)。また盲導犬を使用することによって，社会との関わりが広がることや生きがいを感じるようになることが指摘されている（「盲導犬に関する調査」委員会，1999)。実際に盲導犬を使用するためには，家庭環境や住宅環境が整っていること，貸与後に盲導犬に関わる全費用を負担できること，盲導犬の世話ができることなどの条件を満たすことが必要である。

このように盲導犬を使用している中途失明者は，自立した生活を送り社会参加を果たしているが，失明時の心理的ダメージは他の中途失明者と同様に大きかったことが予想される。盲導犬使用者の障害受容や社会参加の促進に，読書がどのような影響を及ぼすかについて明らかにすることは，非常に興味深い。しかし，これまでのところ，盲導犬使用者と読書との関係を扱った研究は行われていないため，本研究では盲導犬使用者の失明前から現在における読書傾向の変化を明らかにしたいと考えた。なお本研究では，文字を不自由なく読むことができた頃を「失明期前」，文字を読みづらくなった頃から全く読

---

* Reading habit change of the newly blind before and after losing sight: A case study of 4 people using guide dogs.

**ISHIGAMI, Tomomi (University of Tsukuba) and TOKUDA, Katsumi (University of Tsukuba)

めなくなった頃までを「失明期」と定義し，失明期前・失明期・現在の３つの時期を設定した。

Ⅱ．方　法

１．調査対象者

現在，盲導犬を使用している中途失明者４名を対象とした。

表１に，対象者のプロフィールを示した。概要は以下のとおりである。

・年齢は，40歳代１名（男性A），50歳代１名（女性C），60歳代２名（男性B・女性D）であり，すべて既婚者であった。

・職業は，あんま・鍼・灸業（以下，三療）従事者２名（男性A・男性B），歌手１名(女性C)，専業主婦(女性D）であった。なお，女性Cと女性Dは元三療従事者であった。

・現在の両眼の視力は，４名すべてが０（失明状態）であった。

・４名ともに盲学校における教育経験を持っており，三療の免許を取得している。ただし，点字の習得の程度についてはばらつきがみられた。

・失明の原因は，「先天性の緑内障（加えて，白内障の手術による角膜の混濁)」(男性A)，「先天的な虹彩の欠如」(男性B)，「網膜色素変性症」(女性C)，「結核性角膜炎」(女性D）であった。

・失明した年齢は，20歳代２名（男性B・女性D)，40歳代２名（男性A・女性C）であった。

・失明してから現在までの経過年数は，女性Dが最も長く43年であり，次いで男性B（40年)，女性C（14年)，男性A（６年）であった。特に男性Bや女性Dは経過年数が長いため回想することが困難であることが予想されたが，当時の状況を容易に回想することができた。これは，失明時の心理的ダメージが大きく，鮮明な印象が残っているからであると思われる。また，成人期になって失明していることも回想調査に適していたと考えられる。

・盲導犬の使用歴は男性Bと女性Dが最も長く23年であり，次いで女性C（14年)，男性A（５年）であった。

２．調査手続き

調査の実施にあたり，電話によって主旨の説明を行った。調査協力の承諾が得られた場合には，後日電話による聞き取り調査を実施した。

１人あたりの調査所要時間は約45分であった。本調査は2003年６月上旬に実施された。

３．調査項目

調査項目は，対象者の「プロフィールに関する項目」10項目，「読書の質と量に関する項目」４項目，「文字(活字）を読むことや読書についての意識に関する項目」３項目の合計17項目から構成された。

読書の質と量に関する４項目（表２から表５を参照）については，失明期前・失明期・現在の３つの時期それぞれについて回答を求めた。

Ⅲ．結果と考察

表２から表５には，失明期前・失明期・現在の３つの時期における読書の質と量に関する項目と，文字(活字)を読むことや読書についての意識に関する項目の回答を対象者ごとに示した。以下に，結果の概要を述べる。

１．読書の質と量の変化

(1)　どのような本を読んでいたか／読んでいるか

①　失明期前：４名ともに，漫画や雑誌などの娯楽的なものを好んで読んでいた。特に好きだった本として，例えば男性Aは「手塚治虫や永井豪などの絵が上手な漫画家の本」，女性Dは「挿絵が入っている童謡の本やお菓子の家の挿絵がきれいな『ヘンゼルとグレーテル』」を挙げており，視覚的に楽しめる本を選んでいたようである。

②　失明期：４名すべてにおいて，失明期前とは異なる読書傾向がみられた。具体的に読んでいた本として，男性Aは「官能小説」，男性Bは「戦国時代に関する本」，女性Cは「詩集や永六輔の本」を挙げている。なお，男性Aの回答にある官能小説については，地元

表1　調査対象者のプロフィール

項目	A	B	C	D
性別	男性	男性	女性	女性
年齢	46歳	61歳	58歳	63歳
同居者	妻／子ども3人	妻	夫／娘夫婦	夫
職業	三療（開業）	三療（開業）	歌手	専業主婦
現在の視力	右0／左0	右0／左0	右0／左0	右0／左0
失明の経緯	先天性の緑内障であったが、しばらくの間は視力が0.1あったため、文字を読むことに支障はなかった→35歳頃から文字を読みづらくなった→38歳のときに白内障の手術をして、角膜の混濁が生じたことにより急激に視力が落ちた→40歳で両眼の視力が0になった	先天性発育不全であり、特に虹彩の欠如がみられた→小学生の頃は視力が若干低かったが、文字を読むことに支障はなかった→中学生になってから徐々に視力が落ち始め、19歳頃から急激に視力が落ちて文字を読みづらくなった→21歳で両眼の視力が0になった	中学卒業後すぐに網膜色素変性症と診断された→しばらくの間は視力が0.1あったため、文字を読むことに支障はなかった→30代後半から文字を読みづらくなり、徐々に色もわからなくなった→44歳で両眼の視力が0になった	10歳の頃、結核性角膜炎と診断された（小学6年まで休学した）→それから2年間くらいは視力が0.1あったが、12歳頃から文字を読みづらくなった→20歳で両眼の視力が0になった
盲学校における教育経験	18歳（高校卒業後）から3年間通学し、三療の免許をとった／点字は少ししか習わなかった	15歳（中学卒業後）で高等部に入学し、さらに2年間の専攻科で三療の免許をとった／点字は先輩や同級生から教えてもらった	15歳（中学卒業後）から2年間通学し、三療の免許をとった／墨字も点字も習った	12歳のときに盲学校の小学部3年に編入し、中学部、高等部、専攻科まで進み三療の免許をとった／小学部に編入後すぐに点字を習った
失明してからの経過年数	6年	40年	14年	43年
現在の主な読みの手段	点字	パソコンによる音声	点字	点字
盲導犬を使用し始めた年齢	41歳	38歳	44歳	41歳
盲導犬の使用歴	5年／1頭目	23年／3頭目	14年／3頭目	23年／3頭目

の点字図書館において「そのようなふしだらな本はない」と言われたため，友人から借りて読んだと言う。性的な欲求は人が生きていくための根本的なものである。したがって，成人の中途失明者がこのような本を読みたいと思うことは，自尊心の回復や自立への第一歩と言えるのではないかと思われる。このような視点から，中途失明者の社会復帰に関わる者（例えば，点字図書館の職員やリハビリテーション従事者）の意識を変えていくことも必要であろう。また特に印象に残っている本について，男性Aは『大地の子』・『ワイルドスワン』（文面から感じられる中国の独特の文化が好きだった），男性Bは『武田信玄』（武田信玄の生き方に感動した），女性Cは「ハンセン氏病に関する本」（鼻や足がなくなるということがショックだっ

た)・『氷点』(主人公が強く生きる姿に感動した),女性Dは『次郎物語』・『ノンちゃん雲に乗る』・『ああ,無情』・『フランダースの犬』(郷愁を誘うような本や情景がイメージできる本が好きだった)を挙げている。これらの作品名とそれぞれの感想から,4名すべてにおいて,前述した読書による心理的治療機構の中の「同一化」と「カタルシス」が何らかの形で作用したと思われる。福沢(1991)の解釈によると,読書過程における同一化とは,「登場人物の性格や行動に共鳴したり感銘を受けたりすることによって,それに自分を重ね合わせ,抑圧されている感情を解放しようとする心の動き」を言う。またカタルシスとは,「読書材料がもたらすイメージにより,読み手が抑圧されている感情などを発散させていく過程」を指す。さらに大神(1974)が述べているように,カタルシスの後には「洞察(今までに自分が持っている知識や経験などに基づいて,読書材料中の事柄を客観的にとらえること。この洞察によって,自分の行動や考え方に対する再検討ができるようになり,自己成長へとつながる)」が容易に出現することを考えると,この4名にとっての失明期は,読書によって障害受容が促進された時期であったと考えられる。

③ 現在:「週刊誌や盲導犬のニュースレター」(女性C),「婦人向けの雑誌」(女性D)などが挙げられた。読みたい本はあっても,時間がなかったりおもしろそうな本を探すことに苦労したりするため,小説のようにじっくりと読む本をなかなか読めないという点が全員に共通していた。ただし女性Dの場合は,盲導犬を使用するようになってからコーラスや短歌・俳句の講座に通い始め,それらに関係する本を読むようになったと言うことである。これは,盲導犬を使用することによって行動範囲が広がり,そのことが読書活動にも影響を与えたケースである。

(2) どのような手段で読んでいたか/読んでいるか

① 失明期前:全員が裸眼で読んでいた。ただし進行性眼疾患のある女性Cだけは,将来失明した際に点字が必要になると思い,点字で読む練習もしていたと言うことである。

② 失明期:各自がさまざまな読み方をしていた。失明してから点字を主な読み手段としていたのは男性A・女性C・女性Dであるが,その過程において,男性Aと女性Cはルーペや拡大読書器などの機器,またテープを利用していた時期があった。女性Dは点字で読むことができるようになるまで,親や盲学校の教師に代読を頼んでいたと言う。また男性Bは,ほとんど代読であったと述べている。

③ 現在:男性Aと女性Cは,失明期と同様に点字を主な読みの手段としている。一方,失明期と読みの手段が変化したのは,男性Bと女性Dであった。男性Bは約3年前からパソコンの音声ソフトを使用し始めたと言うことである。女性Dは点字で読むこともあるが,時間がないためにテープの方が多くなったと述べている。

(3) どのように入手していたか/入手しているか

① 失明期前:4名ともに,購入していたか,あるいは友人と貸し借りをしていた。

② 失明期:4名すべてが主に点字図書館から点字本あるいはテープを借りていた。なお女性Cについては,読みたい本(墨字のもの)を自分で買ってきてボランティアに頼んで点訳してもらうこともあった。

③ 現在:失明期と入手方法に変わりはないようである。また,パソコンを使用している男性Bはフロッピーディスクを点字図書館から借りている。

(4) 読んでいた/読んでいる量

① 失明期前:読んでいた量が非常に多かったと回答したのは男性Aと女性Cであり,男性Bと女性Dはそれほど多くはなかったと述べている。

② 失明期:男性Aと男性Bは,失明直後に読む量が大幅に減ったと言う。また女性Cは,本を読むことがおっくうになった時期には読書量は減ったとのことである。しかし失明期全体を通してみると,失明期前と比べて女性Cはほとんど変わらず,男性A・男性B・

女性Dは増えたと述べている。読む量が増えた理由として，男性Aは「とりあえず読みたい本（テープも含めて）借りることができた」，男性Bは「仕事関係の本を読む必要があった」ことを挙げていた。また女性Dの場合は，「他の人が読んでいる本が気になって仕方がなかった」と述べている。

③ 現在：4名全員が，時間がないためにあまり読んでいないと回答している。また読む量が減ったことの理由として，4名ともに，盲導犬を使用するようになってから外出する機会が増えたことを挙げていた。前述した女性Dの例のように，盲導犬を使用することで新たな本との出会いがある場合もあるが，外での活動が増えることによって読書量は減ることが確かめられた。

2．文字（活字）を読むことや読書に関する意識

(1) 文字（活字）を読みづらくなったこと，あるいは全く読めなくなったことに対して，どのように感じたか

男性Aは，「ふだんから聞く量が増え，聞くことに疲れてしまうため，テープでは楽しんで読書をすることができなかった」と述べている。また男性Bは，情報が大幅に遮断されることに不安を感じたことや，職場では書類を人に読んでもらいながら仕事をしていたため，とても気を遣う必要があったと言う。さらに女性Cは「貯金通帳の文字を読めなくなったことをとても情けなく感じた」と述べており，女性Dは「兄弟や友人と同じように本を読めないことが悲しく，悔しかった」という回答であった。

これらの回答から，徐々に視力が低下して失明に至るまで（あるいは失明直後）に，今まで読めていた文字が読めなくなった自分に対して失望感や不安を感じ，読書を楽しめなくなった時期があることが確認された。

(2) 本などを読みたいと思ったのは，文字を読みづらくなった頃からどれくらい経ってからか

4名のうち3名（男性A・女性C・女性D）は，「文字を読みづらくなってからすぐの頃」あるいは「読みたいという気持ちは文字を不自由なく読むことができた頃と変わらない」と回答した。3名ともに，その理由として「もともと読書が好きだった」ことを挙げている。特に女性Dの場合は，文字を読みづらくなった時期が思春期（12歳）であったため，兄弟や友人と同じものを読みたいという気持ちが強かったようである。

また望月・徳田（1996）は，中途失明者に関して，点字の習得が読書のおもしろさを知る機会になっていると指摘していることから，点字の習得は読書に対する自信や意欲にも影響を与えると考えられる。女性Cは失明期前において，また男性Aと女性Dは失明期において本を読むことができる程度に点字を習得している。しかし男性Bの場合は，盲学校において先輩や同級生から教えてもらう程度であり，その後も点字の習得に非常に苦労している。それゆえ，男性Bが本を読みたいと思ったのは「つい最近」のことなのであろう。ただし男性Bは，約3年前からパソコンの音声ソフトを利用するようになり，読むことに対して抵抗感がなくなったと述べている。これらのことから，その人に合う読みの手段を身につけることは，本を読みたいという意欲を持たせていくことにつながると思われる。

(3) 自分にとって読書とは何か

「情報源」（男性B）や「知識を得られるもの」（女性C）という回答が挙げられた。また「大きな楽しみ」（男性A），「心がゆったりする，また本には人を熱中させる何かがある」（男性B），さらに「自分を反省させるきっかけになる」（女性C）や「これからの自分のあり方を考えるきっかけになる」（女性D）という回答もみられた。

前述したように，失明期において4名全員が同一化・カタルシス・洞察を作用させるような読書経験をしている。このことから，上述した読書観が形成された理由の一つとして，失明期における読書経験の影響が考えられる。

Ⅳ．まとめ

本研究では，盲導犬使用者の失明期前から現在における読書傾向の変化を明らかにした。その結果，読書の質

や量に関して以下のような変化がみられた。

・失明期前においては漫画や雑誌のような娯楽的な本が好まれていたのに対して，失明期で特に印象に残っている本として挙げられたものは，文学作品が中心であった。

・失明直後では読書量は大きく減ったが，失明期全体を通してみると失明期前とほとんど変わらないか，あるいは増えていた。また現在では，外出する機会が増加したために読書量は減っていた。

今回の調査対象者はもともと読書が好きな者たちであったが，徐々に視力が低下する過程や失明直後においては大きな失望感を感じ，読書を楽しめなくなっていたことが確かめられた。しかしながら，失明期に読まれていた本の種類や特に印象に残っている本に対する感想から，読書による心理的治療機構とされている同一化・カタルシス・洞察が作用したのではないかと思われた。つまり，望月・徳田（1996）が指摘しているように，読書によって抑圧された感情が解放され，障害受容の促進に何らかの影響を与えた可能性が考えられる。このことから，従来，非行少年や受刑者，病者，高齢者などを対象に行われてきた読書療法を，中途失明者に対しても適用できるのではないかと思われる。

中途失明者は視覚障害者の約8割を占めており，障害受容の程度，自立や社会参加の状況は実にさまざまである。一定の視力が永続的に保てる者と徐々に視力を失っていく者とでは，心理的状態は大きく異なる(関，1982)。また人によって，読み能力や読みの手段にも違いがある。障害者に対する読書療法の適用を検討した研究は少なく，日本では施設入所者と読書との関わりの実態を明らかにした研究（望月，2000）などの基礎的研究しかない。したがって中途失明者を対象とした読書療法に関する研究では，まず，どのような特性を持つ者にいかなる効果がみられるのかを明らかにする必要がある。

一方，盲導犬使用と読書との関係について，今回の調査から以下のことが確かめられた。

・盲導犬を使用することによって行動範囲が広がり，新しい趣味ができて，その趣味に関連した本を読み始めるケースがある。

・盲導犬を使用することによって外出が増えるため，読書に費やす時間が少なくなり，読書量は減る。

今後は，盲導犬使用と対比をするために，白杖を使用している中途失明者に対して同様の調査を行い，読書と歩行手段との関係を検証したい。

〈引用文献〉

CARROLL, T.J. (1961). *Blindness: What it is, what it does, and how to live with it*. Brown and Company. 松本征二監修・樋口正純訳（1977）『失明』 日本盲人福祉委員会

福沢周亮（1991） 読書療法．指導と評価，91年9月号，25-28.

望月珠美（2000）身体障害者更正援護施設における読書活動―読書療法の適用可能性の視点から―．実践人間学，2，21-28.

望月珠美・徳田克己（1996）失明と読書―中途視覚障害者の読書態度を中心にして―．日本読書学会第40回研究大会発表資料集，11-19.

「盲導犬に関する調査」委員会（1999）『日本財団「盲導犬に関する調査」～結果報告書～』 日本財団

大神貞男（1974）『読書療法―その基礎と実際―』 文教書院

PFAFFENBERGER, C.J. (1976). *Guide dogs for the blind, their selection, development, and training*. Elsevir Scientific Company. コンパニオンアニマル研究会訳（1987）『盲導犬の科学』 コンパニオンアニマル研究会

坂本洋一（1991）失明告知と障害受容 佐藤泰正編著『視覚障害学入門』学芸図書 pp. 156-160

関宏之（1982）『中途視覚障害者と社会参加―リハビリテーションの現場から―』 相川書房

徳田克己（2002）『視覚障害者の特性及び盲導犬使用者の職場環境』 日本障害者雇用促進協会

表2　男性Aの読書過程

項目	失明期前	失明期	現在
どのような本を読んでいたか／読んでいるか	小学生の頃から漫画少年であり、本を読むことは好きだった。特に、手塚治虫や永井豪など絵が上手な漫画家が好きだった。小説も好きだったが、1冊をじっくりと読むのではなく、いろいろな本を読みかじりしていた。成人してからも、硬いものより娯楽的なものが好きだった。例えば、赤川次郎やシドニー・シェルダンなどテンポがよいものを、気分転換のために読んでいた。	地元の点字図書館に「点字初心者が読むあまり長くない本」を紹介してもらったところ、『まいごになったヤモリの子』と『るすばんねこ』という童話が送られてきた。童話は絵がメインなので、逆にむずかしかった。せっかく点字で読めるようになったのに、このような本ばかりではつまらないと思い、「官能小説を読みたい」と友人に相談した（点字図書館に問い合わせたら「そのようなふしだらな本はない」と言われたため）。すぐに、官能小説が大量に送られてきた。1年くらいはそのような本ばかりを読んでいたため、点字で読むスピードが格段に速くなった。ただ、さすがに飽きてしまった。特に印象に残っている本は『大地の子』と『ワイルドスワン』である。本から感じられる中国の独特の文化が好きだった。	今はおもしろそうな本を探すのに苦労する。とりあえず退屈しのぎに点字本を借りているが、あたりはずれがある。今度は退屈しのぎではなく、腰をすえて読むような司馬遼太郎の『竜馬がゆく』などを読んでみたい。
どのような手段で読んでいたか／読んでいるか	裸眼で読んでいた。	最初はルーペを使い、次に拡大読書器を使った。失明してからしばらくはテープを借りることが続いた。40歳近くだったので、点字で読書をすることはもう無理とあきらめていたが、やってみたら思っていた以上に読むことができた。それ以来、ほとんど点字で読むようになった。また、時間がなかったため、対面朗読をしてもらったことはない。	長い本の場合はテープで読むことがあるが、点字本を好んで読むことの方が多い。
どのように入手していたか／入手しているか	ほとんど買っていた。	点字本もテープも点字図書館から借りていた。	点字本もテープも点字図書館から借りている。
読んでいた量／読んでいる量	非常に多かった。	文字を全く読めなくなった頃は、点字にまだ慣れていなかったため大幅に減った。しかし、とりあえず気になった本を借りることができたため、テープも含めると読む量としては多くなった。	時間がないため、あまり読んでいない。また、盲導犬を使用するようになってから外出することが多いため、読む量は減った。
文字を読みづらくなったこと、あるいは文字を全く読めなくなったことに対して、どのように感じたか	—	点字で読むことができるようになってからも、しばらくはテープを併用していたが、ふだんの生活ではパソコン、テレビ、仕事関係のテープなど、音で情報を得ることが非常に多い。聞く量が多いと、テープで楽しんで読書をすることはできない。とにかく必要な情報（例えば仕事関係の情報）を得るために本などを読んでいたため、「読書を楽しむ」ということからしばらくの間遠ざかっていたような気がする。	—
本などを読みたいと思ったのは、文字を読みづらくなった頃からどれくらい経っていたか	—	もともと読書が好きだったので、本などを読みたいと思ったのは、文字を読みづらくなってからすぐの頃だった。	—
自分にとって読書とは何か	—	—	大きな楽しみ。今の世の中は映像による楽しみが多いが、本はハンディなく楽しめるものだと思う。

表3 男性Bの読書過程

項目	失明期前	失明期	現在
どのような本を読んでいたか／読んでいるか	小学生の頃は、硬いものより娯楽的なものが好きだった。特に漫画はよく読んでおり、『少年』という漫画雑誌を定期購読していた。野球をやっていたため、この雑誌に連載されていたスポーツものが好きだった。また物作りも好きだったので、ふろくも楽しみだった。	歴史ものが好きだったこともあり、特に戦国時代に関する本を読んでいた。印象に残っている本は、新田次郎の『武田信玄』である。武田信玄の生き方に感動した。その他には、趣味の将棋や競馬に関する本を読んでいた。	今はあまり読んでいないが、また歴史ものを読んでみたい。
どのような手段で読んでいたか／読んでいるか	裸眼で読んでいた。	中学2年の頃は、黒板の字を目の前に行って読んでいた。教科書は2cmくらいまで目を近づけて読んでいた。文字を読みづらくなってからは、何でも人（妻、友人、同僚など）に読んでもらうことに専念した。また、テープで読むこともあった。	雑誌程度のものであれば、点字でも読むことができる。テープで読むこともあるが、58歳頃からパソコンを利用している。
どのように入手していたか／入手しているか	月刊の漫画は買っていたが、ほとんどは友だちと貸し借りをしていた。	テープは点字図書館から借りていた。	点字図書館からパソコン用のフロッピーディスクを借りている。新刊でどうしても読みたいものは、まず墨字の本を買ってきて、ボランティアの人などに読んでもらい、それをテープに録音することもある。
読んでいた量／読んでいる量	野球などの外遊びが好きだったため、それほど多くはなかった。	文字を全く読めなくなった頃は極端に減った。しかし、病院勤めをしていた頃は、仕事関係の本も含めて一番読んでいたと思う。	時間がないため、あまり読んでいない。また、盲導犬を使用するようになってから外出することが多いため、読む量は減った。
文字を読みづらくなったこと、あるいは文字を全く読めなくなったことに対して、どのように感じたか	—	目から取り入れる知識が大幅に減ることが不安だった。小学校の頃に覚えた字をどんどん忘れていき、これから先、本などの活字を自分の力で読むことは不可能だと思っていた。点字を読むこともむずかしく、たいへん苦労したことを覚えている。特に、一番最初に就職した病院でカルテなどを読めないことが非常に困った。忙しい看護婦（現在は看護師）さんに聞くために、とても気を遣った。	—
本などを読みたいと思ったのは、文字を読みづらくなった頃からどれくらい経っていたか	—	娯楽のために本を読みたいと思ったのは、つい最近のことである。パソコン用の音声ソフトを使用するようになり、読むことがとても楽になった。	—
自分にとって読書とは何か	—	—	情報源でもあり、心がゆったりするものでもある。本には人を熱中させる何かがある。特に歴史ものに関しては、人物の生き方に感動する。

表4　女性Cの読書過程

項目	失明期前	失明期	現在
どのような本を読んでいたか／読んでいるか	漫画や雑誌を読むことが好きだった。中学生や卒業後すぐの頃は、『少女』『平凡』『明星』などをよく読んでいた。	詩集や永六輔の本をよく読んだ。また、ハンセン氏病の本（鼻や足がなくなるということがショックだった）や『氷点』（主人公が継母にいじめられながらも強く生きる姿に感動した）などが印象に残っている。	週刊誌や盲導犬のニュースレターを読む程度である。これから、芸能人が書いた本を読んでみたい。他にも読みたい本はたくさんあるが、具体的な書名をメモしていないためすぐに忘れてしまう。もっと家にいることが多くなったら、いろいろな本を読んでみたい。
どのような手段で読んでいたか／読んでいるか	主に裸眼で読んでいた。しかし、将来は点字が必要になると思い、点字で読む練習もした。	ルーペを使っていた時期もあるが、文字を読みづらいためすぐにやめた。テープは眠くなってしまうので、ほとんど点字で読んでいた。	どのような本も点字で読んでいる。
どのように入手していたか／入手しているか	漫画や雑誌は買っていたが、点字本は盲学校や地域の点字図書館から借りていた。	点字本は点字図書館から借りていた。また、読みたい本（墨字のもの）を買ってきて、ボランティアの人に点訳してもらった。時間がないため対面朗読をしてもらったことはない。	点字図書館から借りることもあるが、墨字の本を買ってきて、ボランティアの人に点訳してもらうこともある。
読んでいた量／読んでいる量	非常に多かった。	本を読むことがおっくうになった時期は減ったが、基本的には失明前とほとんど変わらなかった。特に子育てをしていた頃はよく読んでいた。	盲導犬を使用するようになってから外出することが多いため、読む量は減った。今は小・中学校からの講演依頼が非常に多いため、そちらに時間をとられている。
文字を読みづらくなったこと、あるいは文字を全く読めなくなったことに対して、どのように感じたか	—	告知を受けた当時は、目が見えなくなるということが信じられなかった。一時期、ルーペを使ってみたが文字を読みづらいため、本を読むことがおっくうになった。30 代後半のある日、盲学校時代のノートを開いたところ真っ白だった。このときに初めて視力が落ちたことを意識した。貯金通帳の文字を読むことができなくなったときには、とても情けなかった。	—
本などを読みたいと思ったのは、文字を読みづらくなった頃からどれくらい経っていたか	—	もともと読書が好きだったので、徐々に視力が低下していた頃も、文字を全く読めなくなった頃も本を読みたいという気持ちに変わりはなかった。	—
自分にとって読書とは何か	—	—	知識を得られるもの。また自分を反省させるきっかけにもなる。

表5 女性Dの読書過程

項目	失明期前	失明期	現在
どのような本を読んでいたか／読んでいるか	小学生の頃は終戦後すぐだったため、あまり本がなかった。小学生向けの月刊雑誌があり、それを時々読むことが楽しみだった。また、友だちの家に童謡の本があり、挿絵を見ることが好きだった。特に印象に残っている本は『ヘンゼルとグレーテル』である。お菓子の家の挿絵がきれいだった。	人が読んでいる本は何でも気になっていたが、特に盲学校の先生に読んでもらった『次郎物語』や『ノンちゃん雲に乗る』が印象に残っている。また、『ああ、無情』と『フランダースの犬』は点字で読んだ。郷愁を誘う本や情景がイメージできるような本が好きだった。	主に雑誌である。日本点字図書館が出している『ホームライフ』という婦人向けの雑誌（テープ）を定期的に読んでいる。その他には、視覚障害者団体が出している雑誌や複数の新聞をとっている。また、盲導犬を使用するようになってからコーラスや短歌・俳句の講座に通い始め、それらに関係する本を読むようになった。もっと家にいることが多くなったら、短歌・俳句の作品集を読んでみたい。
どのような手段で読んでいたか／読んでいるか	裸眼で読んでいた。	盲学校に編入してすぐの頃は、人（親や盲学校の先生）に読んでもらっていた。点字を習い始めて 3 年くらいたった頃から、点字で読むようになった。	今はあまり時間がないこともあり、点字よりもテープの方が多い。
どのように入手していたか／入手しているか	小学生向けの月刊雑誌は買っていたが、その他の本は友だちに借りていた。	点字図書館から借りていた。	テープは買い取る場合もあるが、テープも点字本も点字図書館から借りることが多い。
読んでいた量／読んでいる量	あまり本がなかったため、それほど多くはなかった。	失明前に比べると増えたが、点字で読むには時間がかかるため、読みたい本のすべてを読むことはできなかった。	時間がないため、あまり読んでいない。また、盲導犬を使用するようになってから外出することが多いため、読む量は減った。
文字を読みづらくなったこと、あるいは文字を全く読めなくなったことに対して、どのように感じたか	—	兄弟が本を読んでいると、何が書いてあるのかがとても気になり、「読んで読んで」とせがんでいた。母親は1冊全部を読み聞かせる時間がないため、いつも途中でやめてしまった。毎回、その続きが知りたくて仕方がなかった。皆と同じように本を読めないことが、悲しく、悔しかった。また、見えていた頃は、絵と文字からイメージを膨らませていたため、点字だけで読み始めた頃は違和感があった。	—
本などを読みたいと思ったのは、文字を読みづらくなった頃からどれくらい経っていたか	—	もともと読書が好きだったので、本などを読みたいと思ったのは、文字を読みづらくなってからすぐの頃だった。	—
自分にとって読書とは何か	—	—	自分の考え方や生き方をふりかえり、「これからの自分のあり方」を考えるきっかけになる。

SUMMARY

The purpose of this study was to examine the reading habit change of the newly blind before and after losing eyesight.

In June, 2003, following an overall explanation concerning the objectives of this study and making appointments, telephone interviews were conducted approximately 45 minutes in length with 4 newly blind people who use guide dogs. Interviewees included 2 men who lost their eyesight 6 and 40 years ago, and 2 women who lost their eyesight 14 and 43 years ago respectively. All interviewees were between the ages of 46 and 63, and three vision periods of their lives were investigated: the period before any deterioration in eyesight affected reading ability; the time between self-recognition of eyesight deterioration and complete blindness, and the present. For each time period, interviewees were queried as to what kind of books they read; their reading methods; how they obtained reading material, and the amount of reading they did.

While the greatest change in reading habits was noted during the second, eyesight deterioration–complete blindness period, the other following changes were verified in the data. First, before losing their eyesight, interviewees tended to read entertainment-oriented materials such as comics and magazines. Second, during the period when they began to have reading difficulty and were unable to read, interviewees primarily read literary works. Judging from interviewees' impressions of these books, this reading helped liberate their suppressed emotions and quite possibly helped facilitate the acceptance of their disability. Over this entire period, the amount of reading remained almost the same or even increased in some instances. In fact, in one woman's case, her range of activities and hobbies actually increased due to her use of a guide dog. That is, she began to read books about her new activities and hobbies. Finally, owing to the acute psychological trauma accompanying the complete loss of eyesight, all interviewees' reading declined considerably. At present, the 4 interviewees spend much time going outside with their guide dogs, which has significantly reduced their time for, and amount of, reading.

The Science of Reading, Vol. 47, No. 4 (2003)

文章内容に対する熟達度が学術論文の批判的な読みに及ぼす影響*

広島大学　沖　林　洋　平**

問　題

読み手が文章を読み，文章内容を理解する過程，すなわち読解過程にはさまざまな認知機能が関係している。たとえば，読み手の言語能力や，記憶力，あるいは思考力などがあげられよう。

本研究の目的は，読み手の思考力の中で特に批判的思考力に注目し，批判的思考力が適用された読み，すなわち批判的な読みが，読み手の文章内容に対する熟達度の違いによりどのように異なるかを検討することである。

批判的思考についての定義づけはさまざまになされている。例えば，Beyer (1985) は，「重要な問題についての決定を行う思考」，Ennis (1985) は「判断のための合理的で推察的な思考」，Nickerson (1987) は「自分自身の意見が常に正しいとは限らないことを認識するための思考」としている。このように，批判的思考についての定義は研究者によって様々であり，完全には統一されていない。しかしながら，これらの諸定義からは，批判的思考には思考対象についての推論，判断，合理性の評価などの過程が含まれていることが推察される。

国語教育の立場から，批判的思考力の育成について一連の研究を行ってきた井上(例えば，1972，1998，2000)は，Watson-Glaser Critical Thinking Appraisalを日本語版に改訂し，大学生を被験者として学生の批判的思考力の測定を試みている（久原・井上・波多野，1983)。ここで用いられた改訂日本語版批判的思考力テストでは，回答者にある特定の状況を想起させ，必ずしも形式論理だけでは答えられないような問題を設定している。また，回答者には，想起させた問題状況に対して最も合理的な回答を推論させるという回答方法を設定している。このように，従来の批判的思考研究においては，思考者がおかれた一般的な状況に対する推論能力が重要だとされてきた。

ところが，近年批判的思考のさらに詳細な性質が注目されるようになった。そのひとつが，批判的思考の領域固有性である。Toplak & Stanovich (2002) や，Sa, West, & Stanovich (2001) は，領域固有の信念バイアスや合理的思考と批判的思考との関係を検討することにより，批判的思考の性質の標準化を試みている。

しかしながら，領域固有の批判的思考の読解過程における役割を扱った先行研究は少ない。そのような数少ない研究のひとつに伊東 (1992) がある。伊東 (1992) では，心理学を専門とする研究者のうち，博士号取得者を熟達者，学部の1年次生を初心者として，専門領域の論文の批評を行わせ，発話プロトコルの分析を行った。その結果，被験者の批評の観点が心理学に対する熟達度に応じて異なることが明らかとなった。具体的には，初心者の批評の観点は実験計画についてのものが多く，熟達者はそれに加えて考察に関しても言及していた。このように，伊東 (1992) は，専門領域に対する熟達度が学術論文の批判的な読みの観点に影響を及ぼすことを明らかにした。ある領域に熟達することは，その領域について豊富な知識を身につけることを意味する。文章理解過程においても，文章内容に対する読み手の既有知識が豊富であれば，文章からより多くの情報を正確に抽出するこ

* The degree to which content-area expertise influences the critical reading of academic articles.
**OKIBAYASHI, Yohei (University of Hiroshima)

とが可能となることは，これまでにも報告されている（Kintsch, 1998；Mayer, 2001）。しかし，このことは読み手がある領域に熟達していても，専門外の領域の文章に対しては，既有知識を有効に利用できない可能性を示唆している。

ところで，本研究は心理学系の学術論文の読解過程について検討を行うことを目的としているため，ここで学術論文という文章の特徴を，あらかじめ確認しておく必要があるだろう。本研究では，学術論文の特徴を次の2つの側面からみることにより確認する。まず，学術論文の記述内容からみた特徴である。文章の内容が扱う領域と文章が書かれる目的には，厳密ではないにせよ一定の関係があることは，これまでにも指摘されている（深谷，1996；深谷，1999；大河内・深谷・秋田，2001）。たとえば，自然科学系の文章においては，読み手は科学的な規則性を理解する必要がある。一方，社会科学系の文章においては，読み手は文章中に提出されるさまざまな仮説などの妥当性を比較検討する必要がある。このような特徴を，心理学系の学術論文についてあてはめた場合，問題および考察部分においては文章中に提示された仮説の妥当性を検討する必要があり，方法および結果部分では，実験施行の手続きの再現可能性や結果の一般性を検討することが求められる。したがって，心理学系の学術論文の読解についても，文章の持つ領域固有性を考慮する必要がある。

つぎに，学術論文の記述の読みやすさからみた特徴についても確認しておく必要がある。教科書や新聞などの文章は，既有知識の少ない読み手に対してもわかりやすい文章となるように工夫して書かれている（深谷，1999; Spooren, Mulder, & Hoeken, 1998; Oostendorp & Bonebakker, 1996）。しかしながら，学術論文については，既有知識のまったくない読み手を想定して書かれることは基本的にはない。それよりも，書き手が論文中で主張することを，論理的に間違いがないように書くことが求められる。そのため，学術論文を読むことに熟達していない読み手にとっては，容易には理解することが困難な専門用語や，一般的な文章ではあまり用いられることのない説明形式が用いられることも多い。したがって，学術論文を読むことに熟達していない読み手は，文中に頻出する専門用語や，独特の修辞的説明を理解することに認知資源を費やしてしまい，書き手の主張に関する論理的な誤りにまで気づくことができないことが考えられる。一方，学術論文を読むことに熟達している読み手は，専門領域の学術論文の読解にあたって，読み手の認知資源を効率よく使うことのできる読解方略を用いていることが考えられる。

以上のような問題から，本研究では学術論文の批判的な読みを測定する課題として模擬的な査読課題を設定し，課題成績が文章内容に対する熟達度によりどのように異なるかについて検討を行う。

目　的

本実験の目的は，心理学（認知および教育心理学）に対する熟達度が，心理学系の学術論文の批判的な読みに及ぼす影響を検討することである。

方　法

被験者　大学生および大学院生30名を被験者とした。本実験では，心理学系の学術論文読解に対する熟達度を考慮して3群の被験者群を設定した。まず，心理学系の学術論文の読みに熟達していると考えられる，心理学専攻の大学院生（以下「心理学専攻大学院生」）を設定した。つぎに，心理学系の学術論文の読みには熟達していないが，教育学領域の学術論文の読みには熟達していると考えられる教育学専攻の大学院生（以下「教育学専攻大学院生」）を設定した。そして，心理学領域に限らず，学術論文の読解に対して熟達していない教育学部教員養成課程所属（教育心理学専攻）の学部3年次生（以下「学部学生」）を設定した。各群の被験者数はそれぞれ10名に統一した。分析に際しては，これらの被験者群を以下「熟達度要因」とする。

被験者それぞれに，学会誌に対して学術論文の投稿経

験があるかどうか，また実験実施時に，それぞれの被験者が行っていた研究に関係する学会・研究会などでの発表経験があるかについて質問を行った。これらの質問に対する回答をTable 1に示した。

刺激文 被験者に課した査読課題用の論文を作成した。刺激文は，被験者が批判点を見つけやすいように，実験者が一部改変したものを用いた。刺激文は8ページにより構成される冊子であった（以下「刺激冊子」）。改変前の論文は，伏見（1991）「科学読み物の理解に及ぼす予想活動の効果」であった。また本実験では，被験者の刺激文を読む状況が，できるだけ日常的な学習状況に近いものとなるように，心理学系の学術論文執筆のマニュアルから何点かを引用し，これを以下「読みの注意点」として，刺激文とあわせて提示した。このような手続きにより，読みの注意点を参考にするという読解方略が学術論文の批判的な読みにはたす役割を検討する。

Table 1 各熟達度における学会発表・論文投稿経験のある人数

	学会発表	論文投稿
学部生	0	0
大学院生(教育学)	5	4
大学院生(心理学)	8	6

(それぞれの熟達度における被験者数は10人である)

刺激文作成の手続き 本実験では被験者に学部学生も含まれていたため，心理学系の学術論文の各構成部分（問題，方法，結果，考察）に対して，それぞれ批判が出やすいように，実験者が刺激文の改変を行った。以下，刺激文の作成手続きを述べる。刺激文として用いた論文の内容に関して，問題部分における多くの先行研究の引用や，結果部分における複雑な統計的処理の結果など，被験者にとって難解であると思われる箇所を削除し，その上で刺激文の方法・結果部分では検討していない記述を，問題・考察部分に追加した。また，改変前の論文の研究目的が複数であった場合は，それらの中で最も重要であるものだけを残し，その他に関する記述は改変の過

Table 2 本研究で用いた刺激文の一部と実験者による改変操作意図

問題	操作意図
①また，伏見・麻柄（1989）は，分類することの意味をあらかじめ学習者に明示すれば，分類を扱った学習が有効に成立するのではないかという問題について検討し，それによって学習が有効に成立するということが大枠で支持された。 しかし，②被験者が大学生であったこと等の問題点も残された。	①分類の意味付け学習については，本研究では検討していない。 ②なぜ被験者が大学生であることが問題点となるのかが明らかでない。
このようなことをふまえて本研究では「不自然な」読み物ではなく，「自然な」科学的文章教材を使用して，ルールに基づく予想活動が文章理解に及ぼす促進効果，および③分類の意味づけ学習が学習に及ぼす効果を検討する。	③分類することの意味の検討は，本研究とは直接関係のないことである。
考察	
また，④分類することの意味をあらかじめ学習者に明示すれば，学習者の事後問題の解決を促進することが示された。	④分類の意味付け学習については，本研究では検討していない。
しかしながら，⑤本実験の被験者が大学生であったことは，学習者の予想活動の統制に関しての問題点であると思われる。	⑤なぜ被験者が大学生であることが問題点となるのかが明らかでない

程で全体の文脈に矛盾が出ないように削除した。また，改変前の論文では２つ以上の実験が行われている場合も，その中のひとつの研究のみを記述することとした。それにともなって，刺激文の方法・結果部分では，問題部分で言及されなくなった実験的操作や結果の分析に関する記述を削除した。Table 2には本研究で用いた刺激文の一部と，刺激文の改変操作の意図（以下「改変意図」）の一部を示した。

本実験では，被験者がどのような観点から刺激文の査読を行うかに関して，厳密な統制は行わなかった。そのため，刺激冊子１ページには，次のように被験者が課題を遂行するにあたっての教示が記された。教示内容は，「これからある心理学の論文を簡潔にしたものを読んでいただきます。あなたはこれからこの論文の査読者になったつもりで論文を査読してください。査読者とは，論文やレポートの内容などのチェックを行う人のことです。具体的な査読の方法については細かいルールは設けません。あなたが内容に疑問を感じたり，問題があると考えたところを，積極的にチェックしてください。」というものであった。

刺激冊子２ページには，心理学系の学術論文執筆のマニュアルから何点かを引用し，これを刺激文の読みの注意点（以下「読みの注意点」）とした。読みの注意点の具体的な項目は，細江・細越（1996）と宮谷（1993）から，それぞれ適当であると判断した箇所を引用した。これら読みの注意点の一部をTable 3に示す。また，刺激文の改変箇所は，合計10箇所であった。改変した部分と刺激文の構成部分との関係は，問題に４箇所，方法１箇所，結果１箇所，考察４箇所であった。各構成部分間の改変数が異なっているのは，方法と結果に関してはあまり大きな変更を加えると，被験者の課題遂行を妨害することになると考えたためである。なお，実験者が改変した際「分類の意味づけ情報が学習に及ぼす効果」（伏見・麻柄，1989）を引用した。

刺激冊子７ページには，刺激文の各構成部分（問題，方法，結果，考察）について，どのような点に注意して刺激文を読んだかについて，各構成部分別に箇条書きによる自由記述を求めた。この自由記述により得られた回答を，以下「読みの観点」とする。

Table 3 刺激冊子２ページ読みの注意点（一部を抜粋）

「問題」の部分は以下のような問いから構成されています。 先行研究は何を見出したのか，そしてこの実験でそれと同じような発見を予測しているのか。 この研究の全体的な目的は何なのか。
「方法」の部分は以下のような問いから構成されています。 被験者はどんな人か。 その実験にはどのような手続きが用いられたのか。
「結果」の部分は以下のような問いから構成されています。 適切に計算された統計数値が用いられているか。 結果のみが言及されているか。
「考察」の部分は以下の問いから構成されています。 取り上げた先行研究とその結果はどのように関係しているのか。 この研究はどのように改善できるのか。

手続き

回答方法に関する教示　被験者が刺激文に回答を記入する前に，ボールペンの類によって，疑問に思った点について刺激文に直接書き込むよう教示を行った。

回答方法に関する手続き（学部生）　３人から５人の小集団で行われた。実験時間は30分であった。まず，各被験者に刺激冊子が配られ，被験者に表紙に書かれた教示に従って課題を行うよう求めた。被験者に実験開始前に実験時間が30分であること，30分の実験時間はそれほど余裕のある時間ではないことを口頭で説明した。課題遂行中も，実験者は被験者と同席し，25分が経過したところで残り５分であることを被験者に伝え，30分が経過したところで刺激冊子を回収した。以上の手続きすべてにおいて，実験者は被験者と同席した。

回答方法に関する手続き（大学院生） 大学院生も学部学生と同じ刺激文に対して学部学生と同様の査読課題を行った。大学院生における手続きは以下のとおりである。大学院生は，査読課題を自宅で行ってもよいこととした。しかしながら，課題内容を正確に伝えるために，実験者は刺激文の回答方法について，刺激冊子を配布する際，各被験者に説明を行った。そこで，回答方法や調査用紙の内容に関して，被験者から質問があれば，実験者はそのつど被験者の質問に答えた。刺激冊子の回答期限は配布時から1週間とした。なお，刺激冊子を配布する際には，刺激冊子を封筒に入れ，返却する際にも同じ封筒に入れるよう求めた。

従属変数

刺激文への書き込み 被験者が刺激文に書き込みをおこなっていること，さらに書き込みに関して何らかの意見文が付されていることを批判点として採点を行う基準とした。批判点とみなした被験者の書き込みは，何らかの文章による書き込みである場合や，被験者の書き込みに疑問を感じていることが明示された（クエスチョンマークなどが付されている）場合であった。一方，批判点とみなさなかったのは，下線やカッコによる囲みだけである場合であった。

結 果

批判の種類 刺激文に対する批判点を，刺激文の改変箇所に対する批判（以下「改変箇所に対する批判」）と，非改変箇所に対する批判（以下「非改変箇所に対する批判」）に分類した。また，被験者の書き込みの中には，刺激文の特定の箇所を批判点として指摘していないものがあり，このような書き込みは，その他の批判（以下「その他の批判」）とした。この3種類の批判点の違いを，本研究では「批判の種類」とし，分析においては「批判種類要因」とする。各条件における改変箇所に対する批判，非改変箇所に対する批判，そしてその他の批判に対する平均批判数を，被験者の熟達度別に示したのがTable 4である。熟達度要因(3)×批判種類要因(3)の2要因分散分析を行った。なお，熟達度要因は被験者間要因であり，批判種類要因は被験者内要因である。2要因分散分析の結果，熟達度要因の主効果（$F(2, 27)=15.20$, $p<.01$），批判種類要因の主効果（$F(2, 54)=3.61$, $p<.01$），および2要因の交互作用がみられた（$F(2, 54)=5.24$, $p<.01$）。熟達度要因に主効果がみられたので下位検定を行った。その結果，各熟達度における批判数は，心理学専攻大学院生，教育学専攻大学院生，そして学部学生の順に多かった。心理学専攻大学院生と教育学専攻の大学院生の批判数には有意な差がみられた（$t(27)=5.20$, $p<.01$）。しかし，教育学専攻大学院生学生と学部学生の批判数の差は有意ではなかった（$t(27)=1.01$, n.s.）。つぎに，批判種類要因に主効果がみられたため下位検定を行った。各批判の種類の批判数は，改変箇所に対する批判，非改変箇所に対する批判，そしてその他の批判の順に多かった。しかし，批判数に有意な差がみられたのは，改変箇所に対する批判とその他の批判の間だけであった（$t(54)=2.68$, $p<.01$）。

批判のレベル 本研究では，批判点とした書き込みには何らかの意見文が付されていた。そのため，意見文の内容についても分析が可能であると考えられる。そこで，批判点の意見文について，批判のレベルのカテゴリ分類を行った。本研究では「記号のみ」「単なる疑問」「操作言及」「根拠性」の4つのカテゴリを設定した。記号の

Table 4 各熟達度における批判の種類別の平均批判数

	改変箇所に対する批判		非改変箇所に対する批判		その他の批判	
学部生	0.80	(0.98)	1.70	(2.95)	0.20	(0.12)
大学院生(教育学)	1.40	(1.69)	1.70	(0.78)	2.30	(0.83)
大学院生(心理学)	4.60	(1.63)	2.30	(0.90)	3.30	(2.37)

各セルの被験者数＝10人，カッコ内は標準偏差

みとは，クエスチョンマークなどの記号のみの記述を指す。単なる疑問とは，文中の専門用語などを単に分からないと記述しているものを指す。操作言及とは，刺激文作成の際に，実験者が意図した改変操作（Table 2参照）と，内容的に近い記述を指す。根拠性とは，根拠性を抱いた指摘と定義し，全体の流れから見た論理的な矛盾点などを指摘しようとしている記述を指す。批判点とした刺激文への書き込みにおけるすべての意見文をこれら4つのカテゴリに分類した。各条件における，批判のレベル別の平均批判数をTable 5に示す。さらに，これら4つのカテゴリを「批判のレベル要因」として，熟達度要因(3)×批判のレベル要因(4)の2要因分散分析を行った。なお，熟達度要因は被験者間要因であり，批判のレベル要因は被験者内要因である。2要因分散分析の結果，熟達度要因の主効果（F（2，27）$=17.07$，$p<.01$）と批判のレベル要因の主効果（F（3，81）$=9.43$，$p<.01$），そして2要因の交互作用がみられた（F（6，81）$=5.89$，$p<.01$）。熟達度要因に主効果がみられたので下位検定を行ったところ，各熟達度における批判数は，心理学専攻大学院生，教育学専攻大学院生，そして学部学生の順に多かった。心理学専攻大学院生と教育学専攻大学院生の批判数には有意な差がみられた（t（27）$=5.20$，$p<.01$）。しかし，教育学専攻大学院生と学部学生の批判数に有意な差はみられなかった（t（27）$=1.01$，n.s.）。次に批判のレベル要因に主効果がみられたため下位検定を行ったところ，それぞれのカテゴリにおける批判数は，操作言及，単なる疑問，根拠性，そして記号のみの順に多かった。そのなかで，記号のみの批判は，そのほかのカテゴリの批判より有意に少なかった（t（81）$=5.54$，$p<.01$）が，操作言及，単なる疑問，そして根拠性のそれぞれのカテゴリにおける批判数に有意な差はなかった（t（81）$=1.86$，n.s.；t（27）$=1.86$，n.s；t（81）$=1.00$，n.s.）。

2要因の交互作用がみられたため下位検定を行ったところ，各批判のレベルにおける熟達度要因の単純主効果は，根拠性と操作言及においてみられ（F（2，81）$=17.19$，$p<.01$；F（2，81）$=23.68$，$p<.01$），単なる疑問においては有意な傾向にとどまり（F（2，81）$=2.45$，$p<.1$），記号のみではみられなかった（F（2，81）$=0.43$，n.s.）。有意な単純主効果がみられた各条件の多重比較を行った。その結果，根拠性を抱いた批判数は，心理学専攻大学院生，教育学専攻大学院生，そして学部学生の順に多かった。そのなかで，心理学専攻大学院生と教育学専攻大学院生の批判数には有意な差がみられた（t（108）$=5.33$，$p<.01$）。しかし，教育学専攻大学院生と学部学生の批判数に有意な差はみられなかった（t（108）$=0.55$，n.s.）。つぎに，操作言及にあたる批判数は，心理学専攻大学院生，教育学専攻大学院生，そして学部学生の順に多かった。そのなかで，心理学専攻大学院生と教育学専攻大学院生の批判数には有意な差がみられた（t（108）$=5.33$，$p<.01$）。しかし，教育学専攻大学院生と学部学生の批判数に有意な差はみられなかった（t（108）$=1.10$，n.s.）。

読みの観点に関する自由記述　被験者がどのような読みの観点を持って刺激文を読んだかに関して検討を行うために，刺激文の構成部分ごとに箇条書きで自由記述を求めた。被験者の自由記述の具体例を，刺激文の各構成部分別および熟達度別に分類したのがTable 6である。

考　察

本研究の目的は，読み手の思考力のなかで特に批判的思考力に注目し，批判的思考力が適用された読み，すな

Table 5　各熟達度における批判のレベル別の平均批判数

	記号のみ		単なる疑問		操作言及		根拠性	
学部生	0.30	(0.48)	0.90	(1.60)	0.60	(0.84)	0.40	(0.70)
大学院生(教育学)	0.60	(0.52)	1.40	(0.84)	1.20	(1.40)	0.70	(0.82)
大学院生(心理学)	0.80	(0.63)	2.10	(1.52)	4.10	(1.52)	3.30	(2.26)

各セルの被験者数＝10人，カッコ内は標準偏差

Table 6 各構成要素別の読みの観点の具体例

	学部生	大学院生(教育学)	大学院生(心理学)
問題	本研究の目的はなにか	文章の主述関係を簡潔にすることで，読み手に誤った解釈をさせないように	何が課題か，どのように結果を予測しているか
	この実験で何をしようとしているか	用語の定義づけが明確になされているか	論理の飛躍はないか
	先行研究の問題点	用語が読み手に分かりやすいか	ほかの研究との関係が示されているかどうか
方法	被験者に関する情報	被験者について詳しく書く	追試をするのに必要十分な内容が書かれているか
	実験の細かい手続き	テストに正解を示す	被験者の情報が過不足なく書かれているか
結果	結果が過不足なく述べられているか	統計的な解釈はなされているか，ただ多いだけなのか	客観的基準となる統計的な結果が書かれているか
	どのような結果が出たのか	結果を具体的に書く	目的に対する結果の記述
	専門的な知識がなくてもわかりやすいかどうか	結果の一覧があるほうがよい	結果と考察が混在していないか
考察	実験で得られた結果にはどんな意味があるのか	問題で述べた目的を受けた考察になっているか	一般的な課題から具体的な課題へと流れているか
	今後どう発展させるかが書かれているか	応用性を考慮する必要があるか	専門外の人間でも読める文章であるか
	実験結果は仮説を支持するものであったかどうか	論文の構成と問題設定にずれはなかったか	結果の解釈に無理がないか

わち批判的な読みが，読み手の文章内容に対する熟達度の違いによりどのように異なるかを検討することであった。本研究で行った実験結果をもとに，以下考察を行う。

批判点に関する量的な分析結果を総合すると，以下の2点が明らかとなった。まず1点は，学術論文の批判的な読みにおいて，文章の専門領域に熟達していると，文章からより多くの批判点を見出すことができることである。これは，心理学専攻の大学院生が，ほかの2群よりも有意に多くの批判点を見出していたことにより示されている。もう1点は，専門領域に対する熟達度によって，批判の種類に違いがみられたことである。具体的には，文章の専門領域に対する熟達者のみにおいて，刺激文改変箇所に対する批判とその他の批判に関する批判数が多かった。これらの知見を総合すると，読み手の文章が扱う領域に対する熟達度が，学術論文の批判的な読みに影響を及ぼすことが明らかとなった。また，読み手の文章に対する熟達度は，批判の総数だけではなく，批判の内容にも影響を及ぼすことが明らかとなった。

それでは，具体的には初心者と熟達者とではどのように批判の内容が異なっているのだろうか。そこで，批判点に付された意見文に関する質的な内容分析の結果について考察を行う。本研究では，批判点に付された意見文の内容に関して，「記号のみ」「単なる疑問」「操作言及」「根拠性の指摘」という4つのカテゴリを設定し，これらを批判のレベルとしてカテゴリ分類を行った。そこで，それぞれのカテゴリにおける批判数の分布が，熟達度によりどのように異なるかについて分析を行った。その結果，次のようなことが明らかとなった。まず，熟達度によりカテゴリ別の批判数の分布が異なることが明らかとなった。具体的には，心理学専攻の大学院生のみにおいて，操作言及および根拠性の指摘に属する批判数が，ほかの2群よりも有意に多かった。さらに，心理学専攻の大学院生のみにおいて，それぞれのカテゴリ間の批判数に差がみられた。具体的には，操作言及と根拠性の指摘の批判数に差はみられず，それらが記号のみや単なる疑問の批判数よりも有意に多いというものであった。これ

らの結果を総合すると，文章内容に熟達した読み手の学術論文に対する批判点は，量的に多いだけではなく，質的にも違いがみられることが明らかとなった。このように，学術論文の批判的な読みには，文章内容に対する熟達度が大きく関わっていることが明らかとなった。

次に，読み手が刺激文を読む際に適用した方略的側面から，本研究で得られた知見の考察を行う。文章理解過程においては，読み手の既有知識とともに読解に用いられる認知方略，すなわち読解方略も重要な役割を果たす。初心者と熟達者とでは，文章理解から産出にいたるまでの認知過程に質的な違いがあることが明らかにされている（Scardamalia & Bereiter, 1987）。このことは，読み手が文章内容と既有知識をどのように結びつけるか，その過程に違いがみられることを示唆している。そこで本考察では，読みの観点に関する自由記述の内容分析によって，専門領域に対する熟達度と学術論文の読み方略との関係について検討を行う。Table 6は，刺激文各構成部分に対する熟達度別の読みの観点を示したものである。Table 6より，刺激文を読む際に適用した読解方略は，被験者群間で以下のような違いがみられた。

まず，学部学生の自由記述にみられる特徴は，刺激冊子2ページに記載した読みの注意点をそのまま反映して記述しているということである（例えば「本研究の目的は何か」「実験結果は仮説を支持するものであったかどうか」）。次に，教育学専攻の大学院生の記述の特徴として，用語の定義や，論文全体の論理性について高い関心を示していたことがあげられる（例えば「用語の定義づけが明確になされているか」「論文の構成と問題設定にずれはなかったか」）。そして，心理学専攻の大学院生の記述の特徴として，読みの注意点の内容を踏まえながらも，それらに被験者それぞれの解釈が付け加えられていたということがあげられる（例えば「何が課題か，どのように結果を予測しているか」「追試をするのに必要十分な情報が書かれているか」「一般的な課題から具体的な課題へと流れているか」。）以上の結果から，以下の2点が示されたといえよう。まず，学術論文そのものに読みなれていない学部学生は，読みの注意点をそのまま学術論文の読みに適用しようとすることである。次に，学術論文の読みには熟達していても，読み手の専門領域が異なると，読みの観点が異なることである。

以上のように，文章内容に対する熟達度が，心理学系の学術論文の批判的な読みに及ぼす影響について考察を行った。本研究により得られた知見は，学術論文の読解指導に対して，以下のような意義があるだろう。

まず，学術論文の批判的な読みに関する読解指導においては，文章内容の専門領域に応じた指導を行う必要性が示唆されたことである。中学生や高校生を読み手とした，文章理解能力の発達段階に応じた学習指導に関する研究は，これまでにも数多くなされている（例えば，秋田，1988；犬塚，2002）。しかしながら，本研究では，専門のコースに配属された後の大学生に対しても，教授すべき読解方略があり，それらの具体的内容について検討する必要性が示された。学術論文に比較的近い性質を持つと考えられる説明文における読解方略としては，文章と文章，および文章と図表などの関係性の構造を正確に把握することの重要性が明らかにされている（犬塚，2002；岩槻，2000；Mayer, 2001）。このような，文章中のさまざまな要素を関係付ける過程は，文章理解過程におけるメタ認知機能によってもたらされると考えられる。Peverly, Brobst, & Morris（2002）やThomas & Rohwer（1986）は，説明文理解には「情報選択力」「記憶力」「モニタリング力」が重要な役割を果たすことを明らかにしている。本研究においても，特に大学院生は，文章中の重要な情報を選択し読み手に正確に伝達することや，文章の全体的な論理構造的整合性に注意していることが示された。したがって学術論文読解においても，具体的な読解方略は文章の専門領域によって異なるが，それらのより高次の認知機能としてメタ認知機能があるという認知構造を仮定することは，今後の研究に示唆を与えるだろう。また，具体的な学術論文の専門領域別の読解方略を明らかにしていく必要もあると考えられる。本研究では，心理学系の学術論文を刺激文としたが，教

育学系の学術論文を刺激文とすると，本研究とは異なる結果が得られることも予想される。

最後に，本研究によって見出された学習指導実践上の課題を述べることとする。本研究では，学術論文読解の初心者が熟達者になる過程について検討を行うことは目的としていなかった。そのため，初心者にどのように学習指導を行えばよいかという具体的な教育的介入方策は，今後の研究により明らかにされていく必要がある。なぜなら，読み手が有効な読解方略を実際の読みに適用することができて，はじめて読解指導に対する教育効果が確認されるからである。本研究は，このような教育的介入方策の検討の必要性を示す基礎的な知見を与えるだろう。

附 記

1．本研究では，すでに刊行された心理学系の学術論文を改変するという手続きによって刺激文を作成した。その理由として以下の2点をあげる。まず，前述したように，学術論文はその論理性を重視して書かれるために，被験者それぞれが共通して指摘できる論理的矛盾点があまり多くないことが推察されることである。もう1点は，改変前の原文そのままでは，実験に用いるにあたっては，分量的に多すぎると推察されることである。心理学系の学術論文の標準的な規定文字数が約16,000字相当であることを考慮して，本研究では刺激文の字数を約4,000字とした。しかしながら，4,000字でも実験に用いるには多すぎることも考えられる。今後はさらに適切な字数設定について検討を行う必要がある。

2．本研究では，刺激文を作成するにあたって以下の文献を引用した。

フィンドレイ，B．細江達郎・細越久美子（訳）（1996）『心理学実験・研究レポートの書き方』北大路書房 pp. 47-84.《FINDLAY, B. (1993) *How to write a psychology laboratory report.* Australia: Prentice Hall of Australia Pty Ltd.》

伏見陽児（1991）科学読み物の理解に及ぼす予想活動の効果 読書科学，35(4)，131-139.

伏見陽児・麻柄啓一（1989）分類の意味づけ情報が学習に及ぼす効果 教育心理学研究，**37**(3)，270-275.

宮谷真人 研究論文・レポートの書き方（1993）利島保・生和秀敏（編）『心理学のための実験マニュアル―入門から基礎・発展へ』 北大路書房 pp. 53-71.

謝 辞

本論文のまとめるにあたってご指導くださいました広島大学大学院教育学研究科 森敏昭教授に御礼申し上げます。また，本実験を行うにあたり，こころよくご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

秋田喜代美（1988）質問作りが説明文の理解に及ぼす効果 教育心理学研究，**36**(4)，307-315.

BEYER, B.K. (1985). Critical thinking: What is it? *Social Education*, **49**, 270-276.

ENNIS, R.H. (1985). A logical basis for measuring critical thinking skills. *Educational Leadership*, **43**, 44-48.

深谷優子（1996）テキスト学習研究 東京大学教育学研究紀要，**36**，291-299.

深谷優子（1999）局所的な連結性を修正した歴史テキストが学習に及ぼす影響 教育心理学研究，**47**(1)，78-86.

井上尚美（1972）『言語・思考・コミュニケーション』明治書院

井上尚美（1978）『言語論理教育への道』文化開発社

井上尚美（1998）『思考力育成への方略』明治図書

伊東昌子（1992）設問に対する論述筆記解答が説明文の批判的な読みに及ぼす効果 読書科学，**36**(1)，22-29.

犬塚美輪（2002）説明文における読解方略の構造 教育心理学研究，**50**(2)，152-162.

岩槻恵子（2000）説明文理解におけるグラフの役割―グラフは状況モデルの構築に貢献するか― 教育心理学研究，**48**(3)，333-342.

KINTSCH, W. (1998). *Comprehension*. New York: Cambridge University Press.

久原恵子・井上尚美・波多野誼余夫 (1983) 批判的思考力とその測定 読書科学, **27**(4), 131-142.

MAYER, R.E. (2001). *Multimedia learning*. New York: Cambridge University Press.

NICKERSON, R.S. (1987). Why teach thinking? In J. Baron & R. Sternberg (Eds.), *Teaching thinking skills: Theory and practice* (pp. 27-40). New York: Freedman.

大河内祐子・深谷優子・秋田喜代美 (2001) 信号が歴史教科書の記憶と理解に与える効果—本文と欄外情報を関連付ける信号の挿入— 心理学研究, **72**(3), 227-233.

OOSTENDORP, H. VAN., & BONEBAKKER, C. (1999). Difficulties in updating mental representations during reading newspapers. In H. Van Oosptendorp., & S. R. Goldman (Eds.), *The construction of mental representation during reading* (pp. 319-340). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

PEVERLY, S.T., BROBST, K.E., & MORRIS, K.S. (2002). The contribution of reading ability and meta-cognitive control and development of studying in adolescence. *Journal of Research in Reading*, **25**, 203-216.

SA, W.C., WEST, R.F., & STANOVICH, K.E. (1999). The domain specificity and generality of belief bias: Searching for a generalizable critical thinking skill. *Journal of Educational Psychology*, **91**, 497-510.

SCARDAMALIA, M., & BEREITER, C. (1987). Knowledge telling and knowledge transforming in written composition. In S. Rosenberg (Ed.), *Advances in Applied Psycholinguistics* (pp. 142-175). New York: Cambridge University Press.

SPOOREN, W., MULDER, M., & HOEKEN, H. (1998). The role of interest and text structure in professional reading. *Journal of Research in Reading*, **21**, 109-120.

THOMAS, J.W., & ROHWER, W.D. (1986). Academic studying: The role of learning strategies. *Educational Psychologist*. **21**, 19-41.

TOPLAK, M.E., & STANOVICH, K.E. (2002). The domain specificity and generality of disjunctive reasoning: Searching for a generalizable critical thinking skill. *Journal of Educational Psychology*, **94**, 197-209.

SUMMARY

The purpose of this study was to investigate how expertise in psychology influences critical reading ability.

Three groups of students participated in this study: 10 educational psychology undergraduates; 10 graduate students whose majors were either educational philosophy or educational methodology, and 10 graduate students majoring in either cognitive or educational psychology. For this investigation, an academic article of psychology was amended with revisions from a non-related article so as to confuse students with expertise in psychology. This revised article was presented to the three groups of students, and they were asked, as reviewers of the article, to critically read and write comments based on their critiques.

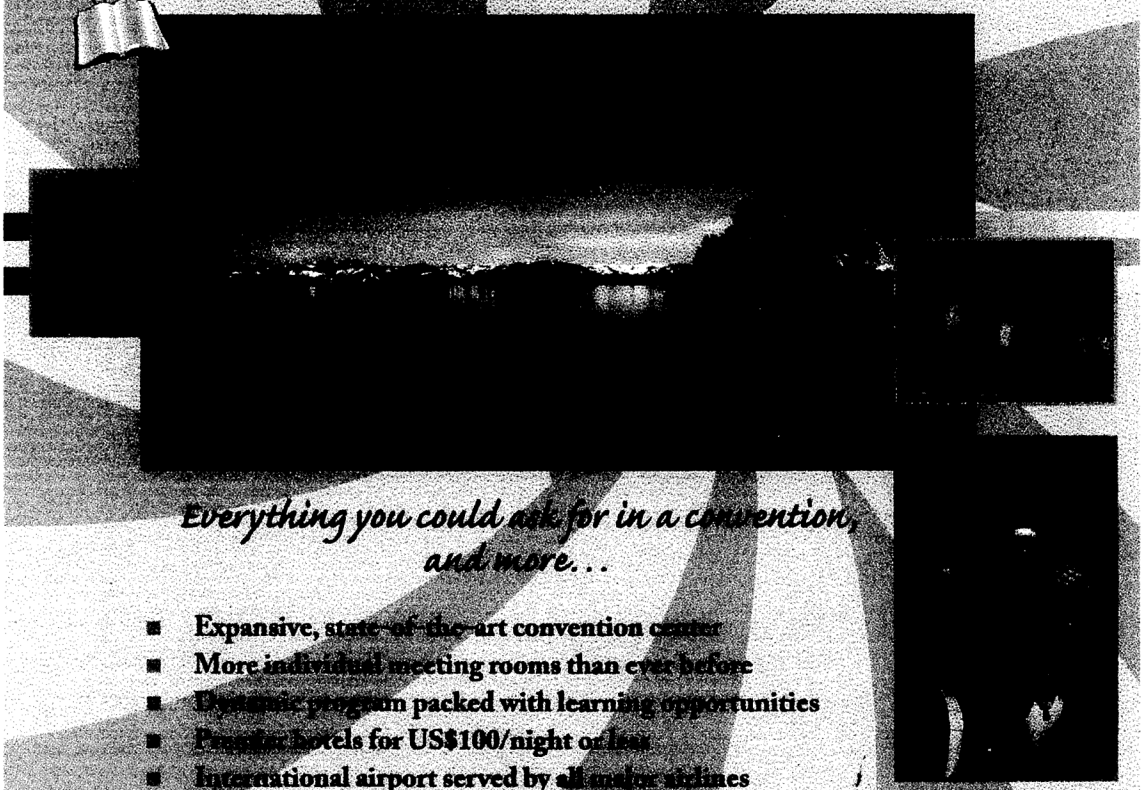
The results of this study indicated that a reader's degree of content-area expertise influences critical reading performance. Quantitative results suggested that graduate students of psychology pointed out more amended portions than any other student group. A qualitative analysis of the sentences in student reviewers' commentaries found that four criteria categories for revision emerged: a simple mark, a simple question, mention to revise the manipulation, and lengthier critiques based on the presented text's mistakes. The average number of mistakes found in the revised text and the unrevised text were assessed along with other types of whole text criticism, and whereas the number of mistakes found in the revised text and other, lengthier criticism were deemed significant by the examiner, the average number of mistakes from the unrevised text were seen as insignificant data. Comparing these two categories, however, graduate students of psychology mentioned the need to revise the manipulation and/or gave lengthier critiques of the presented text's mistakes more often than making a mark or asking a simple question. In addition, there was no statistically significant difference amongst the other two groups with regards to these four analytical method categories. These findings could be useful to explore the appropriate instructional methodologies to improve students' critical reading skills.

Get Ready for Reno-Tahoe!

Host to the International Reading Association's 49th Annual Convention

May 2–6, 2004

TEACHING THE WORLD TO READ



Everything you could ask for in a convention, and more...

- Expansive, state-of-the-art convention center
- More individual meeting rooms than ever before
- Dynamic program packed with learning opportunities
- Popular hotels for US$100/night or less
- International airport served by all major airlines
- Affordable fine dining and headliner entertainment
- Adventurous night life of nonstop fun
- Comfortable, dry temperatures
- Plenty to see and do...from sailing on Lake Tahoe to skiing in the Sierra Nevada (even in May)

Join us! Visit the IRA website for more information at www.reading.org.

International Reading Association
800 Barksdale Road • PO Box 8139
Newark, DE 19714-8139, USA

03-395 A&M 8/03

Vol. 47, No. 4 December, 2003

THE SCIENCE OF READING

Published by **The Japan Reading Association**

President: NARUSHIMA,Hajime **President-elect**: ARISAWA,Shuntaro

EDITORS

ARISAWA,Shuntaro IKEDA,Shinichi KANEKO,Mamoru MORO,Yuji
SAKAMOTO,Takahiko TOKUDA,Katsumi TSUKADA,Yasuhiko
Joseph J. Dilenschneider James M. Furukawa Donald A. Leton

EDITORIAL ADVISORS

Chung Inho FUKAWA,Genichiro FUKUZAWA,Shusuke HANAWA,Kazuaki
IMAI,Yasuchika ISHIHARA,Toshimichi KAMITANI,Junsaburo KITAO,Norihiko
KOBAYASHI,Kunio KOGO,Reiko KOZAI,Hidenobu MIZUNO,Tomomi
MOCHIZUKI,Yoshitsugu MURAI,Mariko OSHIRO,Yoshitake SHIKANAI,Nobuyoshi
TAKAGI,Kazuko UCHIDA,Nobuko YAMADA,Jun YAMAMOTO,Takaharu
YOROZUYA,Hideo

CONTENTS

Original Articles

Script familiarity effect on letter detection in Kanji-Kana-combined words ……FUJITA, Chikako KAWAKAMI, Masahiro……119

Elementary school students' and mothers' perception of picture books ……KOBAYASHI, Toshiko ……128

Reading habit change of the newly blind before and after losing sight: A case study of 4 people using guide dogs ……ISHIGAMI, Tomomi TOKUDA, Katsumi ……139

The degree to which content-area expertise influences the critical reading of academic articles ……OKIBAYASHI, Yohei ……150

THE SCIENCE OF READING is published four times a year (with an occasional combined number) as a service to members of the Japan Reading Association. Membership in the Japan Reading Association is open to anyone interested in reading. Please send all applications for membership and queries to Takahiko Sakamoto, Japan Reading Association, Department of Japanese Language Education, School Education Center, University of Tsukuba, 3-29-1 Otsuka, Bunkyo, Tokyo 112-0012, Japan.

第47巻 第4号
〈通巻 第 186 号〉

平成15年12月1日 発行

会員頒布

編集 日本読書学会編集委員会
発行人 日本読書学会
発行所 日本読書学会
〒 112-0012 東京都文京区大塚3－29－1 筑波大学学校教育部国語教育研究室内

印刷・勝美印刷株式会社

平成十五年十二月一日発行（年四回発行）